種をまく 世界がひらく
山梨県立美術館
Yamanashi Prefectural Museum of Art

Document of “MINABI 2019”

みなび
みんなでつくる
びじゅつかん

『みんなでつくる美術館』2019

記録集

みんなでつくる美術館　2019年

記録集

目次

2　「テーマの意味と役割について」／伊藤 美輝
3　開催概要およびデータ
4　村上 慧氏トークショー
7　フロアマップ
9　「家」の展示・公開・紹介
24　みなび・ワークショップ
28　みなび開催中のイベント
31　村上さんと美術館に泊まった(!)
36　「家制作者と村上さんが語る会」
39　「みなび」を振り返る／村上 慧
40　「みなび」アンケートから
41　実行委員の気づき、あれこれ
42　あとがき

「みんなでつくる美術館」通称「みなび」は、大人も子どもも、障がいのある人もない人も、アーティストも一般の人も、誰もが自由に参加して、ワークショップ(体験的創作活動)を楽しみ、みんなで一つの展覧会を創る美術館活動です。

2002(平成14)年から開催し、今年度で18回目を数えます。その間、詩や絵の募集、美術館の外での展開、夏休みだけでなく通年の開催、地域の大学や商店街との連携など、様々な試みを行ってきました。

今回は、「美術館に『住む』?」というテーマのもと、アーティストの村上慧氏をお迎えし、美術館という空間に自分の居場所の「家」を創るというワークショップを中心にして、じっくりと制作、鑑賞することに挑戦しました。「家」というと、懐かしい家、夢ふくらむ家、好きなものでいっぱいの家、秘密基地など、それぞれの「家」を想像することができます。参加者はアーティストや建築家、中高校生、家族など様々でしたが、「家」を創った参加者も、家々を巡って鑑賞した参加者も、思い思いの「家」を堪能し、みんなで創り上げた美術館を楽しんでいる様子が窺われました。

今後も「みなび」の新しい可能性を探っていきたいと考えています。改めましてお力添えいただきました皆様にお礼を申し上げますとともに、これからもご協力とご支援をいただきたくお願い申し上げます。

山梨県立美術館学芸幹　井澤 英理子

「テーマの意味と役割について」

みなび副実行委員長　伊藤 美輝（山梨学院短期大学保育科教授）

今年度のテーマは「美術館に『住む』?」。このテーマの背景には、山梨県立美術館が40周年を迎えた昨年度からの、新たな第一歩として、「みなび」というよりは、これからの美術館における新しい方向性への思いが込められています。2002年から「みなび」は始まりましたが、まもなく20年を迎えようとしています。その間に、様々な思いの中で「みなび」のあり方を「探り、表す」テーマが検討されて、多くのワークショップが展開されてきました。そして、2019年度は「今までにないこと」すなわち「今までしたことがないこと」を考える中で、単に催しとしての「みなび」だけにとどまらず、これからの美術館のあり方に対して、新たな扉を開くテーマとなったのではないかと考えています。

「美術館に『住む』?」?「・・・なにそれ?」そのように感じてしまうテーマです。私たちは、日常生活において一見わからないことに出会うと、今までの自分の経験を掘り起こすように振り返り、その「新たなこと」をどのように捉えればよいのか、思考するわけです。好奇心や探求心を発揮させ関わるか、途方に暮れて回避するか等の行動が表れます。さて、今回のテーマはどのような好奇心や探求心を生み出したのでしょうか?具体的な内容は、この先に記載されておりますので、目を通していただければと思います。

今回のテーマにもう一度目を向けてみると、「住む」と言う言葉がとても重要な意味を持っています。まず、美術館と言うところが、住むところではないということです。

非日常的な空間としての、美術館の役割と言うものが、多くの方々の既成概念として、あるのではないでしょうか。それから、「住む」と言うことと「住む場所としての家」の意味に対して、改めて考えることを求めているテーマともなっています。

ともに当たり前だと思っていた、概念に問いかけることにより、新たな出会いと、発見が生まれる、そのような機会になればと願ったことが、このテーマ設定となっています。

今、教育の世界においては、「芸術と科学」の融合としてSTEAM教育という言葉を聞くことが増えてきました。ここでは、この意味について説明はいたしませんが、これは「みなび」の当初より考えていたことに結びつくことであると同時に、科学や芸術に対する概念を変えていくものとして、大いに期待するものです。そのような時代の流れの中で、新たな「みなび」の役割と、美術館のあり方を考える2019年度の「みなび」となったと確信しております。今後も、「みなび」に対して大いに期待をしていただき、関わりを持っていただければ幸いです。

テーマ

美術館に「住む」?

普段は訪れるだけの美術館の中に「家」をつくって、「住む」としたら、どんな家をつくりますか?

そんな難題に見事に答えた参加者のあっと驚く家々が、美術館のさまざまな場所に出現しました。
メイングストには本テーマのインスピレーション源となった「移住を生活する」などのプロジェクトを手がけ、国内外で注目を集める美術家の村上慧氏をお迎えしました。

みんなでつくる美術館　2019 ― 美術館に「住む」? ―

開催概要およびデータ

主要開催日(家公開日)｜　2019年7月27日(土)～8月1日(木)　　休館日｜　7月29日(月)

開館時間｜　午前9:00～午後5:00　　(家公開時間　午前9:30～午後4:00)

場　所　｜　館内外各場所、県民ギャラリーC

対　象　｜　だれでも　　参加、観覧料｜　無料

メイングスト｜　村上 慧(むらかみ さとし) 氏　(美術家)

オリエンテーション

5月　19日(日)　村上 慧 氏　トークショー & みなび説明会
「家」制作エントリー開始／みなび・ワークショップ①申し込み開始

制　作

6月　16日(日)　「家」制作エントリー　選考結果発表
エントリーグループごとにそれぞれの場所で制作(美術館工房使用も可)

7月　7日(日)・14日(日)・20日(土)・21日(日)　みなび・ワークショップ
「美術館に心地よい居場所をつくろう」

設　営

7月　20日(土)～26日(金)　「家」館内設営

展示公開イベント

7月　24日(水)・25日(木)　わかば講座　ワークショップ「お部屋を飾ろう!」

7月　27日(土)・28日(日)　「小さな家」　県民ギャラリーCへ持ち込み展示

7月　27日(土)～8月1日(木)　「家」公開 ／ 「村上 慧 映像展」／ ミニワークショップ
ワークショップ「『つくる』って何?挑戦してみよう!　綿から糸へ。」

7月　27日(土)　「家褒めツアー」「家制作者と村上さんが語る会」

●入場・参加人数　：　2,646人

●館内設置「家」数　：　37軒

●ボランティア総数　：　68人

家制作／山梨学院短期大学保育科 伊藤ゼミ、専門学校サンテクノカレッジ、県立峡南高等学校 クラフト科、県立甲府工業高等学校 建築科 建築研究部、県立甲府第一高等学校 美術部、駿台甲府高等学校 美術デザイン科、絵画造形教室 アトリエさくら、カワイ絵画造形教室と仲間たち、たまご教室、Mt.Fuji Project、チームジュリア、茂井健司(現代美術家)、本杉琉(美術家)、雨宮国広(縄文大工)、小澤建築工房、当館「現代美術講座」「キッズ・プログラム」参加の皆さん

主　催｜　みんなでつくる美術館(みなび)実行委員会・山梨県立美術館

後　援｜　山梨県造形教育連合／山梨県社会福祉協議会／NHK甲府放送局／山梨日日新聞社・山梨放送／テレビ山梨／山梨新報社／朝日新聞甲府総局／テレビ朝日甲府支局／産経新聞甲府支局／毎日新聞甲府支局／読売新聞甲府支局／日本ネットワークサービス／エフエム富士／エフエム甲府／エフエム八ヶ岳

協　力｜　(福)さかき会みらいファーム／河口湖美術館／南アルプス市立美術館／(有)ディスプレイ 遠藤／(株)島田プロセス／べきん堂／みくに画材店／山梨・人ねっこアートワーク／山梨学院大学・短期大学／(株)SPSやまなし／サントリーフーズ(株)／甲信梱包(株)／(株)大直／(株)東日本イノアック／大塚製薬(株)

村上　慧 氏　トークショー
& みなび説明会

｜日時｜　2019 年 5 月 19 日(日)　午後 1：30～
｜場所｜　講堂　　申込不要・聴講無料
｜参加人数｜　122 人

「みなび」のプレイベントとして、メイングストの村上慧氏に自身の制作や、日頃考えていることなどについて語ってもらいました。その後、みなび事務局より、「みなび」スケジュール、「家」制作についての説明を行いました。

村上 慧(むらかみ　さとし)
1988年、東京生まれ。2011年、武蔵野美術大学造形学部建築学科卒業。「瀬戸内海国際芸術祭」(2016年)、「風を待たずに－村上慧、牛嶋均、坂口恭平の実践」(熊本市現代美術館／2017年)、「東アジア文化都市2018金沢 変容する家」(金沢21世紀美術館)などに参加。2016年、第19回岡本太郎現代芸術賞(TARO賞)入選。2017年、文化庁新進芸術家海外派遣制度によりエレブルー(スウェーデン)に滞在。

「移住を生活する」プロジェクト

2014年4月より村上が始めたプロジェクト。発泡スチロール製の家をかついで移動し、その先々で寝泊まりの土地を交渉して住むというもので、日本各地のみならず、韓国やスウェーデンなど国内外で展開。プロジェクトを元に絵本『家をせおって歩く』(福音館書店)、および日記を編纂した『家をせおって歩いた』(夕書房)が出版された。

(図7)『家をせおって歩く(完全版)』表紙

以下トークショーの一部を抜粋　　(…は中略)

「つくる」について

周りを見渡して自分でつくれるものはありますか。最近このことについてずっと考えています。例えばパソコン、僕普段からすごく使っているし、このマイクとか、服とか、全て誰かの仕事なんですよね…この紙コップも、多分僕自分ではこんなにきれいにつくれないじゃないですか。そういうものに囲まれて生きている訳なんですけど、自分の靴下がどこでつくられてるかって考えたことありますか。…お互いに支え合って生きているわけですよ。…自分の暮らしが誰かの仕事でできているっていうことがわからなくなっています。そしてそれが表に出てきたのが、僕は8年前の東日本大震災だと思っています。

東日本大震災の被災地へ

岩手県の陸前高田市に行って…これは3年前なので震災からもう5年経ってるんで、もう瓦礫とかも無くなって、嵩上げ工事も始まっていて、っていう状況で…「佐藤たね屋」さん(図1)…という種屋さんがあって、一面津波で流されて草原になっているところに突然「佐藤たね屋」が現れて、…佐藤貞一さんはもともと震災前から種屋をやっていて、津波で店も家も流されちゃって、…役所が復興政策を立てるのをみんなが待っていた時期に、佐藤さんは一人で店を復興させました。佐藤さんに会うと、「材料はいくらでもあったから」と言って、瓦礫などを使って自分の店を手づくりでつくり直しました。…僕が訪ねたすぐ後ぐらいに、復興事業の嵩上げのため、撤去命令が出て、今はもうないんですけど。

…もう一人、わいちさん(片山和一良)って言って、岩手県の大船渡市の越喜来っていうところにあるんですけど、「潮目」っていう建物(図2)で、わいちさんって建設会社の人なんですけど、休みの日を使って、近所の瓦礫を集めてきて、津波資料館っていう名前になってるんですけど、当時の津波の時の写真とか、流されてたモノとかが中に展示されていて、…2年、3年やっているうちに3階建てになっていて、津波で流されてきた舟を遊具にしたりとかしていました。

東北で佐藤さんとわいちさんに出会って、色んなことを思い出したというか…、特に佐藤さんに会って言われたんですけど、「…あれは戦争みたいな状況だった。サバイバル精神を発揮しろ。何かの代わりにならないものはない。できないことはほとんどない」…それでこの経験を活かして、みなびでワークショップをやってみたいと思いました。

(図1)佐藤たね屋

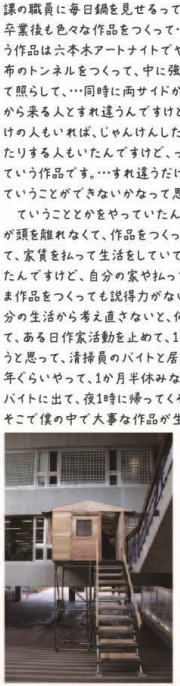
(図2)津波資料館「潮目」

「作家」としての活動に至るまで

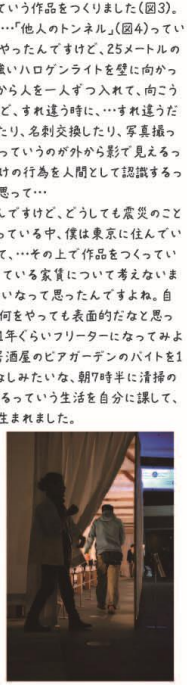
大学は美術大学の建築学科に入って…僕が大学2年生の時に…仲間と3人で大和ハウスの設計コンペに参加しました。…普通の家は壁に囲まれていて、その中に人が住んで、壁に囲まれているから敷地の境界とかが生まれるんですが…、それを裏返してみようと思って、壁の外側に住む家を考えられないかってやってみました。ちなみに住作を援って、…大学の教授に「これは面白いんだけど、住みたくはないよね、私が施主だったら、あなたには頼まないと思う」って言われました。建築って、施主と一緒にやっていく仕事なんで、施主と関係がつくれないと、こういう仕事もできないんですよね。…だったら作家になった方が良いな、そっちの方が自由にできるなって思いました。

…卒業する頃には、いわゆる建築家というよりは、…作家になっていました。大学の卒業制作では、大学の敷地内の学生生活課が2階にあるんですけど、その窓のところに単管パイプで、3畳ぐらいの小屋を6メートルぐらい持ち上げて、窓の目の前に家を出現させて、卒業制作展の期間中ずっと鍋をやる、学生生活課の職員に毎日鍋を見せるっていう作品をつくりました(図3)。卒業後も色々な作品をつくって…「他人のトンネル」(図4)っていう作品は六本木アートナイトでやったんですけど、25メートルの布のトンネルをつくって、中に強いハロゲンライトを壁に向かって照らして、…同時に両サイドから人を一人ずつ入れて、向こうから来る人とすれ違うんですけど、すれ違う時に、…すれ違うだけの人もいれば、じゃんけんしたり、名刺交換したり、写真撮ったりする人もいたんですけど、っていうのが外から影で見えるっていう作品です。…すれ違うだけの行為を人間として認識するっていうことができないかなって思って…

ということとかをやっていたんですけど、どうしても震災のことが頭を離れなくて、作品をつくっている中、僕は東京に住んでいて、家賃を払って生活をしていて、…その上で作品をつくっていたんですけど、自分の家や払っている家賃について考えないまま作品をつくっても説得力がないなって思ったんですよね。自分の生活から考え直さないと、何をやっても表面的だなと思って、ある日作家活動を止めて、1年ぐらいフリーターになってみようと思って、清掃員のバイトと居酒屋のピアガーデンのバイトを1年ぐらいやって、1か月半休みなしみたいな、朝7時半に清掃のバイトに出て、夜1時に帰ってくるっていう生活を自分に課して、そこで僕の中で大事な作品が生まれました。



(図3)《小平マンション》
卒業制作 /2011年



(図4)《他人のトンネル》/2013年

転機となった作品「清掃員村上」

それが「清掃員村上」っていう映像作品です。この黄色い「清掃中」っていう看板が売ってたんですよ、これ行けるなっと思って、清掃員みたいに見える服をネットで買って、色んなところに「清掃中」っていう看板を立てて、勝手に掃除をする、勝手に清掃員になりました。…誰も気づかないんですよ。清掃員って透明人間なんですよね、店のスタッフも気が付かない。でも、清掃員にはばれるんですよ。だから、清掃員には注意しながら、こそこそやるんですけど、清掃員から逃げながら清掃員をやっていう。ちなみに2と3(図5)もあって、2では今度は同じようにやるんですけど、めっちゃ掃除しないっていう、これも誰にも何も言われないんですよね、多分何って声をかけて良いのかわからないんだと思うんですけど。(掃除を思いっきりする)3は世界中でやりました。「清掃員村上」をつくって、僕にとってこれが大きな作品になって、つまり今まではイベントの中で作品をつくったり、展覧会があるから作品をつくるっていうところからやってたのが、誰からも頼まれてないけど、一人でも面白いことができるんだって、そういう意味で初めてだったんですよ。

「移住を生活する」プロジェクトの始動

この後に家を背負って歩く作品プロジェクトに結びついていくんですけど、「清掃員村上」と「移住を生活する」は僕の中では完全に繋がっていて、それでバイト生活を止めて、背負う家のための発泡スチロールを買ってきました。このアイデア自体は前からあって、今は定住文明で、みんな住所を持っていて、その住所があるから市民であることができて、住所があるから税金が払えて、色んな信用があって、住所というものを軸にして人が生活しているっていう定住の文明なんですけど、その中で移住生活をしてみたら、一体何が起こるのかっていうのをやってみたいなと思いました。

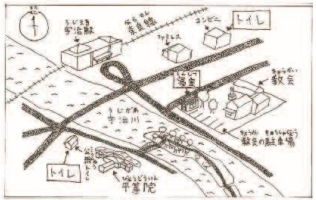
このプロジェクトがどんなものかというと、最低限の持ち物を持って、移動生活をするんですけど、住所は持ち歩かないので、寝る時は誰かの敷地を借りなくちゃいけない。公園とかって勝手に寝るといけないし、目立つし、僕としても寝れたもんじゃないんで、…敷地を借りて、安全な場所を確保してから寝るっていう生活をずっと続けるというプロジェクトなんですけど。で、間取り図(図6)っていうのがあって、これは僕が始めたことじゃなくて、町を自分の家に見立てるっていう考えはずっと昔からあるんですけど、僕の家は家って呼んでますけど、寝室に過ぎないというか、トイレもお風呂もないので、家じゃないなと思って、じゃ家はどこかって思った時に、家は町にあるんですよね。銭湯はお風呂場って呼んで、コンビニをWi-Fiスポットって呼んで、公衆トイレのことをトイレって呼んで、コインランドリーのことを洗濯機と呼んで、町に住む。

…ひとまず生活を始めてみようと思って、つまりお金を貯めてから使いながら生活するのは生活ではないなと思って、僕は旅がしたい訳ではなくて、生活を実践したいと思ったので、移動しながらお金を稼がなきゃいけないなと思って、やってみないとわからないなと思ったんですよね。やってみれば、お金を稼ぐ手段は見つかるだろうと思って、とりあえず始めてみたっていう、そしたら美術館に呼んでもらえたりとか、絵本(図7)ができたりとかしました。…まさか絵本の出版社から声がかかるなんて夢にも思ってなくて、事前には予想できないんですよ。…まずその状態に自分がなってみてから、色々見つかるだろうっていう気持ちは僕は絶対に忘れないようにしようとしています。去年は韓国に行って、一昨年はスウェーデンに行きました。来年はモンゴルでもやりたいと思っていて、下見に行ってきたんですけど…、土地の感覚が日本と全く違うんですよね。モンゴルの映像と一緒に日本の映像も見せたら、日本の土地の感覚が相対化されるんじゃないか、自分のことがわかって面白いんじゃないかと思っています。…自分を知るためには自分から離れなきゃいけない。このプロジェクトも、僕が普段…家賃を払って、どんな生活をしてるか知りたいなと思って、この生活の仕方とは違うやり方をしてみたいと思って始めたところがあって、基本的には知りたいんですよね。

「みなび」に向けて

夏には発泡スチロール製の家を山梨県立美術館に持ってきて、ここに住んでみたいな、と思っています。…以前台湾の中学生と一日半かけてワークショップをして、佐藤さんじゃないけど、身近な段ボールとか、ブルーシートとか、ペットボトルを別の使い方をして、最低限自分が周りからプライバシーを保てて、できれば雨も凌げる簡単な家を、3人ひとグループくらいでつくりました。…こうやって身近な素材を別の使い方をするっていうのはとても面白いなと思って、みなびでもそういったワークショップを「美術館に住む?」っていうタイトルの下でこの美術館の中でやろうと思っています。

(編集:下東佳那)



(図6)町を家に見立てた間取り図 /2014年5月7日

美術館という場所を自分の手で変容させていくということを来場者の人とできたら面白いかなと思います。美術館を自分のものにしてしまう。というか、そこです

1
こどもたちと一緒に、美術館のなかのスペース(階段の下とか、柱と柱の間とか、階段の一部とか、机の下とか、そういうちょっとした場所)に、「自分の部屋をもってくる」感じで、ダンボールなどで空間をつくります。移動できる部屋があってもいいです。部屋ひとつを数人でつくり、その人たちが部屋の主になります。これは数週間かけてやってもいいし、集中的に1-2日でやってもいいかもしれません。館内の壁に、その部屋へ案内するようなサインを貼ったり、その部屋を作った人たちの表れを部屋の前に掲げたりしてもいいかもしれません。

2
それらの部屋を一般に公開する期間を設けます。「美術館のなかの町」が、美術館を訪れる人を迎える期間です。各部屋で子供達に何か出し物をやってもらってもいいかもしれません。誰かの子供の親が、美術館の中のいろんな部屋を訪ねるようなことととかが起こると面白いと思います。

1階の入口で正面のところに各階段横のスペースを「観光案内所」みたいに活用し、そこには、段ボールでつくった、すこし大きめの美術館の模型をおきます。その模型は美術館を訪れた人なら好きに加工することができるようにします。自分の形を紙で切り出して模型の中に置いたり、模型の壁を塗ったり、なにか変なオブジェを置いたりしてもいいかもしれません。この模型に手を加えるときに、子供だけじゃなくて全世代の来場者が参加できる感じにしたら良いと思います。

村上 慧 2019.3.9

村上慧 氏コメント

こんなところから「家」について考え制作

美術館に「住む」?

展示・公開 | 次ページより紹介します。

7月27日(土)〜8月1日(木)

個性的ないくつもの「家」が美術館内に出現しました。エントリー制で選ばれた制作者が試行錯誤して制作した家の数々です。制作者はそこに「住み」、お客様をお迎えしました。

また、村上慧氏とワークショップでつくった、心地よい居場所『家』も並びました。

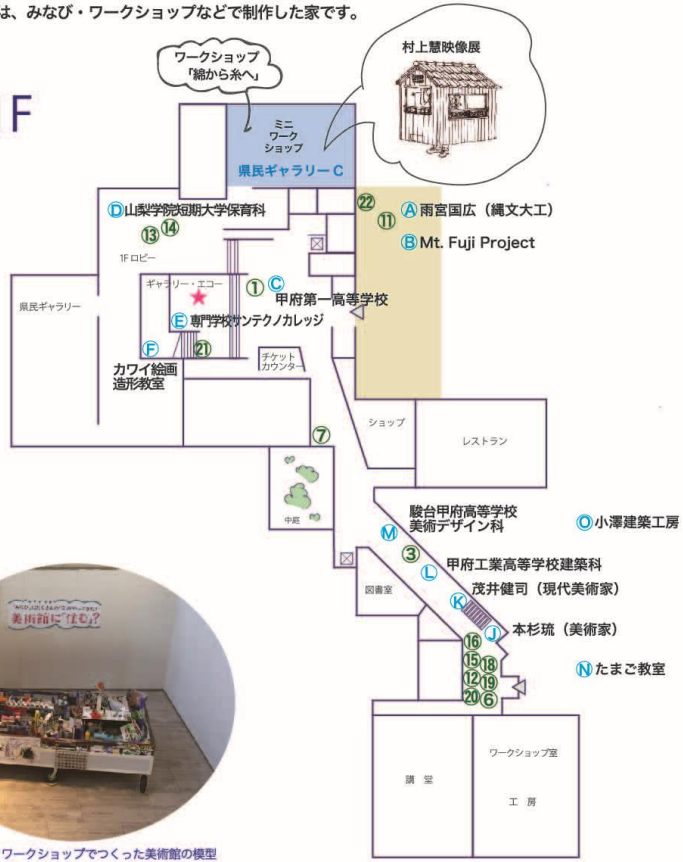
家(ほ)褒めツアー | 7月27日(土) 午後2:30〜

村上慧氏と、みなび副実行委員長伊藤美輝がナビゲーターとして、家制作者や見学者と一緒に各家を観て回りました。

フロアマップ ｜「家」設置場所

Ⓐ～Ⓞ は、事前エントリーで制作した家です。
①～㉒ は、みなび・ワークショップなどで制作した家です。

1F



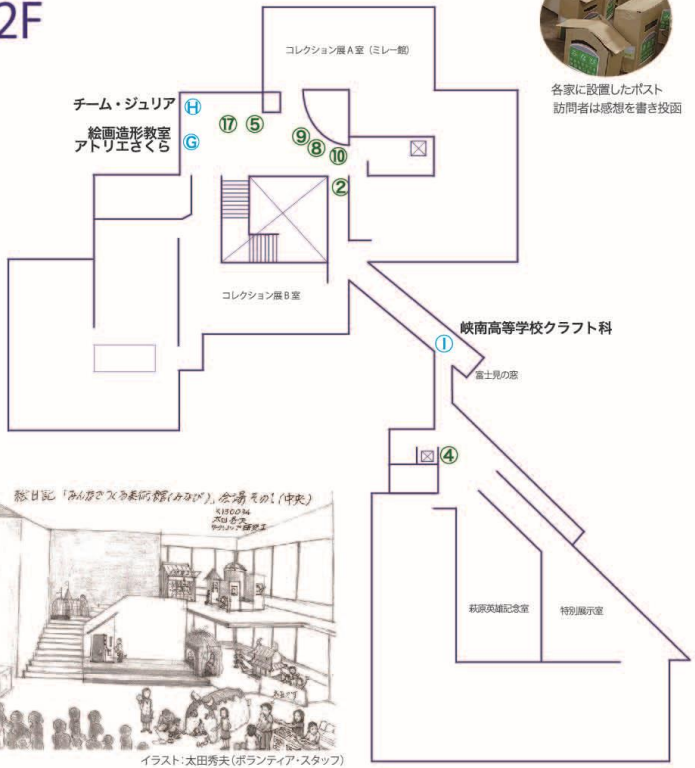
★村上さんとワークショップでつくった美術館の模型

みなび みんなでつくる びじゅつかん

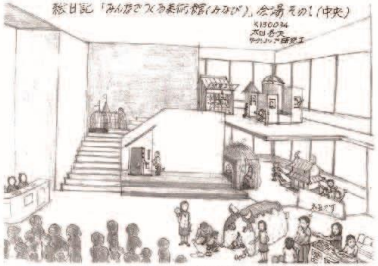
美術館に「住む」?

「みなび」にたくさんの「家」がやってきた！

2F



各家に設置したポスト
訪問者は感想を書き投函



イラスト：太田秀夫（ボランティア・スタッフ）

楽しくつくるための10のルール

美術作品を守るために
1. 火器は使わない。
その他危険物、毒物、悪臭物もダメです。
2. 生物（動物、生花、水、土、食品等）も使わないでね。

美術館運営のために
3. 家の撤収後、施設を原状回復する。
4. 美術館の施設管理・運営に支障がないように。
5. 自立する家倒れてこないように設計しよう。
6. 営利を目的としないこと。
7. 公の秩序を守ってね♪
8. 音は出てもOKでも大音量はNG。

家の管理について
9. 家主（設置者）の責任で行う。
一般公開中は1名常駐していることが望ましい。難しい場合は美術館スタッフがお留守番します。
10. 密室にしない。
電源使用OKでも発熱に注意（LEDランプ等で対応可）

A 家についての説明文「家のコンセプト」「この家を訪れた人ができること」（家公開時の原文）と制作者の感想をご紹介します。

原始の小屋

雨宮国広（縄文大工）

家のコンセプト

人類 700 万年の伝統木組み・原始の小屋です。全て石の道具でつくりました。「木造木組み」の原点です。

この小屋は、「**すべ**て**は**ひ**とつ**の**わ**。」によって形になりました。持続可能な世界の**カギ**があります。

この家を訪れた人ができること

柱に触れること　（木のささくれに注意してね）

みんなでつくる美しい地球

人間は、毎日ゴミをつくり暮らしている。ゴミには、いろいろな分類の仕方がある。有害なもの、無害なものなど･･･。そもそもゴミに無害なものなどあるのだろうか。有害なものだからこそゴミなのである。そのゴミは地球全体に、溢れかえっている。

「汚い地球」になっていることは、誰にでも想像出来るし真実なのだ。しかしほとんどの人間は、「美しい地球」だと思っている。毎日の暮らしによって、確実に「汚い地球」になっているにもかかわらず、今の地球環境を理解していないのだ。ゴミが自分の目の前から見えなくなれば、忘れてしまうのだろうか。

人間は本来、ゴミなどつくらずに、「生きていける動物」なのだ。「みんなでつくる美術館」には、そのようなもので溢れかえってほしい。全生命の「母なる地球」のために。

雨宮 国広

家見めツアー 7月27日

雨宮国広さんこの日は不在

村上:村上慧　伊藤:伊藤美輝　MS:みなぴスタッフ

家作者　ツアー参加者

村上　自分で石斧をつくって、それで、つくっているのです。

　　石斧からつくっているんですね。

MS　今日は石斧ありませんが、雨宮国広さんが8月1日に縄文人の服を着て来てくれるそうです。

村上　縄文時代の生活を体現しています。

伊藤　先日も、どうやって日本人が台湾から海を越えてやって来たのかというプロジェクトにかかわっていました。その丸太の舟をつくっていました。

※「3万年前の航海 徹底再現プロジェクト」（国立科学博物館主催）

B

Mt.Fuji Project の家

Mt.Fuji Project ものづくりワークショップ

猪原隆広　町田ひろみ　江頭信行　佐藤圭佑
峰昌宏　鎌上愛華

家のコンセプト

今まで、空き家を素材に、子どもたちが作品をつくるワークショップをしてきました。その空き家は、年々参加してくれた子たちの作品が増え、その場は、子どもたちの創造力を開放できる場として機能してきています。壁に絵を消しては描き、作品をくっつけたり。展示したり。子どもたちは、それを見て制作意欲を高めています。空き家は、Kamiku Studio と名付けられました。

Kamiku Studio を参考にミニチュア化したものが、この Mt.Fuji Project の家です。家枠以外は、すべて子どもたちの作品を参考に再現、またはそのまま展示しています。

この家を訪れた人ができること

作りたくなる家 ― この家に作品を作った、描いた子ども達と同年代の子達がここを訪れて、作りたくなる気持ちが湧いてきてもらえたら。そんな部分を、訪れた方達と共有できるとうれしいです。

Mt.Fuji Project は、2000 年から富士の麓で作品を制作、展示している美術団体です。

みんなで作る美術館の家に住む？を体験して

私たちは、Mt.Fuj iProjectの家のミニチュア版を美術館の中に設け、何かを作りたくなる気持ちが湧いてくるような、そこを訪れた方達とお話しできるような家をイメージして、スタッフと作成いたしました。

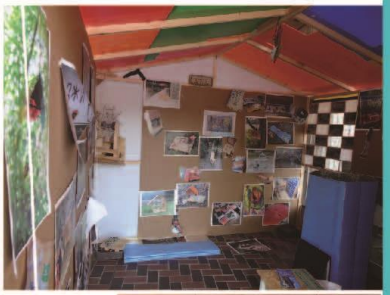
実際の精進湖にあります空き家を利用したMt.Fuji Projectの家は年々、家の中の子どもの作品も多くなり、家を素材というよりも、子どもの本来の制作意欲を満たす環境づくりに力を入れるようになり、今後もそれが楽しくてこのワークショップを続けていくのだろう思いますが、2000年開始当初の生活を作っていくワークショップがしたいという思いは、今回の展示により再確認でき新たな気づきも頂きました。

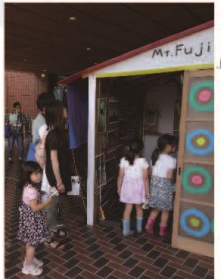
実際、美術館の会期中に常駐することは、精進湖でやっている夏休みのワークショップ当日とも重なり難しかったのですが、皆さんの作品を拝見させていただきまして、美術館の一部に居心地を求め、利便性や生活感とはかけ離れたそこに居るという意味。そこでの時間。美術館という箱の中、家を作るという会期の中、の守られた中に作成された皆さんの家。こういった環境下だからこその開放感も作品に現れていてとても面白かったと思います。

作家の村上さんも、美術館でみんなで泊まりたいとおっしゃっていましたが、参加作家のレジデンスも1日でも体験できると全てが完結するように感じました。

作家の方、関係者の方々、貴重な体験をありがとうございました。

鎌上 愛華（Mt.Fuji Project ものづくりワークショップ・アートキャンプ 代表）





家見めツアー 7月27日

村上　（Mt.Fuji Projectのワークショップの写真について）毎年やってるんですか？

　　はい。毎年夏休みに。今年もやります。

村上　これは廃材ですか？

　　もともと平屋を借りてスタジオとして使っていまして、その平屋の部材の一部を持ってきました。

村上　実際に現場で使っているものをもってきたんですか？

　　そうです。

C

ミ　ケ

甲府第一高等学校
美術部（一美）

家のコンセプト
「もし、ふわふわで巨大な猫に抱きついて眠れたら」
そんな誰もが考えたことがあるような夢を叶えられる家をイメージしました。
どこを触っても柔らかい、三毛猫のミケの家です。

この家を訪れた人ができること
寝転がってお昼寝
壁や床を猫のようにふみふみ

私たちは、甲府第一高等学校の美術部です。
1年生5名、2年生7名の計12名で活動しています。油彩やデザイン、立体作品など生徒が主体的に作品に取り組んでいます。

今年のみなび展は「家」というスケールの大きい課題で、しかも発想が無限に膨らむ面白い企画でした。しかも現代美術作家が全体を主導するという今までにないスタイルで画期的でした。本校でも美術部員に投げかけたところ、是非参加したいという即答でした。私なりの発想もあったのですが、それは一旦伏せ、生徒にアイデアを出させたところ、「ミケの家」というシンプルかつ大胆な発想に度肝を抜かれました。制作は終始和やかで団結しながら様々な趣向を凝らしながら何とか形に持っていきました。その発想から制作プロセス自体がまずはワークショップの醍醐味で、部員一同大きな達成感を得ておりました。

会場には、子どもから大人までが参画した様々な家が建ち並び、一種異様な雰囲気に包まれていましたが、どの家も味わい深く、私も様々な家を"訪問"してみては感性をくすぐられる体験をさせていただきました。

本来「家」とは生活の拠点であって、かつ刺激的な空間であるべきだと考えています。私自身も最近自宅を自身でリフォームしましたが、家とは小さい頃にはみんなが描く夢の箱だったと思います。とかく疲れた現代社会の中にあっては家がただ休むところ、寝るために帰るところになってしまっています。

本当はそうではないんですね!

みなびの家には大切なものがたくさん詰まっていました!

石田 泰道（山梨県立甲府第一高等学校 美術部 顧問）

家集めツアー 7月27日

猫の中に入れるんですか?
靴を脱げば入れます。
食べられたみたいになりますね。
村上　つくってみてどうでしたか?
美術室ではなく、廊下でつくったので暑かったです。
綿が足りなくなりそうだったので、綿をどうする、という話が出ました。
伊藤　全然知らない生徒が見たら「なにこれ!?」ってぎょっとしてなかった?
興味津々で見てもらいました。
村上　猫は、だれのアイデアですか?
猫バスみたいな家をつくろうという話があって。

D

集合！家たち
ーひとつもいいけど、いっしょもいいねー

山梨学院短期大学 保育科
伊藤ゼミ２年生 14名

家のコンセプト
一軒一軒でも楽しく遊べるけれど、つながるともっと楽しく遊べる家たち。
素材はダンボール、分解して運んだり、使わない時は収納ができる構造になっています。

この家を訪れた人ができること
家を動かして、組み合わせを楽しんでください。

「ひとつもいいけど、みんなもいいね　集まれ家たち」

子どもたちは、狭い空間が好きです。その狭い空間の中で、自分の体とそれを包み込む壁との距離感において、空間における自らの存在を感じているのだと思います。同時に、その空間は、その中に身を置く自らの存在の中にある、意識の世界における様々な空想(妄想)を展開させる、装置となっているのではないかと思います。

そのような空間を保育室の中に置くことにより、どのような遊びが展開されるのだろうかという興味から、小さな家をつくることを企画していました。そのようなところに、「美術館に『住む』?」という「みなび展」のテーマと出会ったわけです。当初は、一つ一つ独立した家をつくる予定でしたが、美術館に展示することを考える中で、つながる家、集まる家などの要素も加え、制作を始めました。基本となる素材は段ボールとして、2人から3人のグループにより制作が行われました。

美術館展示後は山梨学院幼稚園の保育室に設置され、子供たちの生活の1部となっています。そこで、どのような遊びが展開されるか!保育現場からの報告を受けながら、当初の目的の考察を行っています(この文章が印刷された頃には、レポート作成も終了してほっとしているのでしょうね?)

伊藤 美輝（山梨学院短期大学 保育科教授 ゼミ指導）

伊藤　それぞれの学生がつくった家の入り口をつないで迷路のように並べようかと考えたんだけれど、なかなかつくることで一生懸命で、そうならなかった。でも、ここに持ってきたら、その場で子どもたち自身がどんどん動かしていろんな組み合わせをし始めた。かえってその方がよかった。
保育所や幼稚園では、使わないときは、たたむことができる。そこも考えた。やりながらどうしようかということもあった。この家も、本当はドーム型の屋根をつくりたいという思いがあったんだけれど、そこまでいかず、パラソルにしようかということになり、結果的にパラソルをぐるぐる回せるものになった。
村上　2人1組でつくったところが、まず面白いと思いました。それが組み合わせて、全体が迷路になったところが、さすが保育科の学生さんだと思いました。
伊藤　そこまで考えていたかはわかりませんが、素材としては面白いものができたなと思います。

E

デュアリティホーム

専門学校サンテクノカレッジ の有志「ものづくりチーム」

小俣拓三　五味徒来　斎藤夏美　塩島ゆう　千野祐貴也
中村咲月　柳濟光　若林卓也　渡辺稜真
（指導教員　山本芳彦　渡辺恵美）

家のコンセプト

住人は以前から住んでいる古い家の中で手紙が届くのを一人で待っています。ポストに手紙が入るとすぐ気づくように住人が自ら音が出るように設計しました。住人は家の中で未来を変えるテクノロジーを研究しています。トタン屋根にはミレーの『種をまく人』が鶴のように表現されており、家内の天井には反転した『種をまく人』がカラフルに描かれています。家の「外観」を見たときの印象と「室内」に入ったときや、「住んだ」ときの印象の変化やギャップみたいなものを意識しました。家の名前にはデュアリティ"duality"「二面性」という言葉を入れました。

この家を訪れた人ができること

手紙をポストに入れるとマークが光り、室内では音が鳴ります。即座に住人に伝わるため、すぐに返事がきます。網で作られた簡易スクリーンで映像を流します。研究者が製作している実験中のものを見ることが出来るかもしれません。

音や光を出す、モノを動かすなどのシステムを担当したのはコンピューターコミュニケーション科のメンバーです。家の設計、ペイントを担当したのはマルチメディア科グラフィックデザインコースのメンバーです。技術とアートの融合を目指し、研究、製作をしています。

外見が古びた感じで、中が近未来にした。外のポストにお手紙を書いて入れると、干マークが光り、中にスピーカがあって、「you got a mail.」という音が出る。
屋根には、『種をまく人』が描かれていて、家の中、天井にも描いてあって、上から見た絵と下から見た絵が違う絵になっている。ここに住んでいる人は、何かを研究している人という感じです。

「アート×テクノロジー×家作り」

一見、古い物置のような木造の家。美術館に昔から住んでいるようなリアルな雰囲気を出したくて外観のペイントなどにこだわりました。屋根には「種をまく人」、室内の天井には反転した「種をまく人」がポップに描かれています。ポストに手紙を入れるとセンサーでランプが光り、室内の住人に音で知らせるため即座に手紙のお返事を書き、お渡しすることができます。中に入ると実は近未来的なこの家には、テーマにしたduality(二面性)という言葉を表れに使いました。展示期間中にはたくさんのお手紙をいただき、ありがとうございました。

専門学校サンテクノカレッジにはコンピューターコミュニケーション科・情報システム科の情報系と、マルチメディア科グラフィックデザインコースのアート系の学科があります。普段はそれぞれの専門分野を学んでいる学生たちですが、みなび展をきっかけに念願のアート×テクノラボというチームを結成しました。放課後遅くまで学校に残り、完成に向けて互いの力を発揮しました。家の骨組みが出来上がったときには、学生、教職員を集めて日本建築の伝統的な「上棟式」(餅投げ)を実施しました。テクノロジーチームは「音と光のポスト」づくりだけでなく「靴を運んでくれるロボット」を室内に展示するため長い時間をかけプログラムづくりに奮闘しました。展示発表の期間だけでなく、家づくりの制作期間は学生たちにとって普段の授業では体験できない多くのことを学ぶことができた時間だと思います。

この「家づくり」がアート系の学生と情報系の学生が協力した初めての大作となりました。以後継続して「みんなで何かすごいものをつくろう」と現在も「ものづくり」を通してアートとテクノロジーの融合を目指し、新たな表現を発見していこうと研究を続けています。

渡辺 恵美（専門学校サンテクノカレッジ 教員）

F

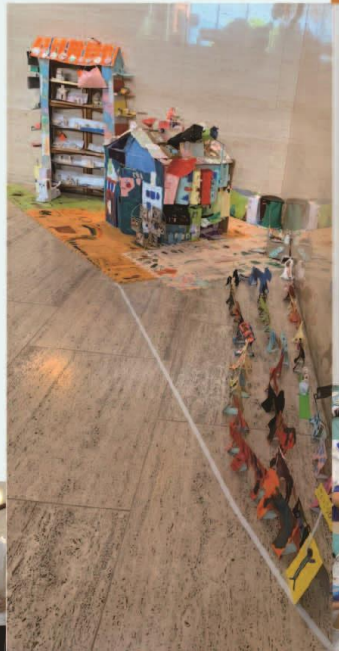
ぎょうれつのできる ぞうけいのいえ

カワイ絵画造形教室と仲間たち

たじまはるな　いそべりく　ないとうしゅん　さとうみつき
しばゆうな　いしかわゆうき　おおもりりん　あさのがく
なかざわゆうな　ないとうれん　いそべりと　いまむらかむい
やまだまさひ　しばゆうき　まるやまりゅうし　かさいはるとと
みねゆうと　にのみやゆうだい　こにしはるま　たなかねね
いしかわみずき　なかのはるき　おざわさら　しむらこうへい
いしはらるい　しみずあやか　やまぐちけいら　しみずあらた
すがやえいじ　いまむらろいと　さとうゆづき　こにしひろと
なかごみかいと　おおもりゆう　えんどうそら
あしざわぎんじろう　くぼたそうた　ひらがあおい
なかのきさき　おざわいっき　わたなべさくと　おざわともこ
他 2才から１７才？の子どもたちの共同制作です 。

家のコンセプトとこの家でできること

人や動物や妖怪？が、家の中や外でみなさんの訪問をまっています。 やねはフルーツのかおりがするトイレットペーパー を溶して固めたかわらや、秘密基地がのっています。 ぎょうれつを待つあいだに おみせもあります。家には、くつをぬいで ひとりずつはいってね。ぎょうれつにならぶ 動物や人を紙でつくってなべてね。 二つ折りにした紙にすきな絵をかいてぎょうれつにならべてみよう。絵は「みなび展」県民ギャラリーC室でかいてもってきてね。



私たちが、みなび「美術館に住む？」に参加した作品は「ぎょうれつのできるぞうけいのいえ」です。幼児と児童を中心とした約40名の共同制作です。

それぞれの子どもの個性を生かせる作品にしたいと思いましたが、それが一軒の家の中に収まるのかという不安がありました。しかし、5月19日の村上慧先生の講演で「家を裏返す」という発想を聴きその不安は消えました。壁の外に住む場所があってもよいのではというところからイメージはどんどん広がっていきました。人や動物や妖怪が子どもたちの手から創り出された家の中や外に住み始めます。イメージはさらに広がり家に入る順番を待つ行列ができます。行列で待つ人のためのお店も出来ました。実は宇宙人も宇宙船で来ていました。そんなお話がどんどん繋がる活動になりました。

展覧会は美術館のいろいろな場所に様々な家が展示してあり探すことも面白いと思いました。また、見るだけではなく家の中に入れることがとても楽しめました。別々の場所でつくられた家が集まっても不思議とひとつの共同体が出来上がりました。子どもたちに美術館は楽しいところだと感じてもらえる展覧会だったと思います。そして美術館にはみんなの居場所があると感じてもらえる展覧会になっていたら良いなと思います。

小澤 智子（カワイ絵画造形教室 講師）

G

駄菓子のさくら

絵画造形教室 アトリエさくら

武藤早玖弥（高１）　浅沼香子（中２）
宮下七緒（中１）　小林心詠（中１）
古屋李紗（高２）　石橋彩乃（高２）
上條想実（小５）　上條暁隆（アトリエさくら 講師）

家のコンセプト
おばあちゃんが住んで生活しながらやっている、昔ながらの駄菓子屋さん。
駄菓子もみんな手づくりです。

富士吉田と河口湖の絵画造形教室に通う、小５～高２までのみんなで協力してつくりました。

「駄菓子屋さんをつくって」

今回みなびの、村上慧さんの美術館に家をつくるワークショップに参加できたことは、私にとっても、私の教室の生徒達にとっても、大変貴重な体験となりました。生徒達主体で、アイディアからつくり方まで考えて制作してもらいたかったのもあり、小学校高学年以上の生徒たちに呼びかけ、小学５年生から中学生、高校生の７名で参加しました。話し合いでは、いくつかの案の中から、おばあちゃんが住んでいそうな駄菓子屋さん、ということにまとまりました。

私としてはファンタジックなお城とか、カラフルな感じになるのかと勝手に想像していたので、少々渋めの駄菓子屋さんの案が出たのは意外でした。駄菓子屋さんは未だ何軒か富士吉田などに残っているお店があるそうで、何人かは通ったりしていたとのことでした。アニメなどにも駄菓子屋さんが出ていたりするので、そういったメディアからの情報もあるようでした。

現在の子どもたちにとっても、駄菓子屋さんは心ときめく場所のようで、全員の意見が一致しました。共同で制作できる日は、２日と限られていて休みの日に集まって家の構造物をつくりました。小物などは、みんなで手分けして自宅や普段の教室の時間につくっていました。それぞれが率先し、どのようにつくるか材料は何を使ったらいいか、悩みながらつくっている姿に、素直に感動し、物つくりの原点を見たような気がします。

私は材料の提供や、つくり方についてアドバイスしたりしていましたが、ほとんどは子どもたちによってつくられ、その完成度に私自身驚きました。当日の会場でも、小さな子から年配の方まで、楽しんでもらえていたようで、つくった本人たちにとっても大きな喜びとなりました。美術館にたくさんの家が並ぶということも、とても興味深い事でした。

館内に設置された家々は多種多様に溢れ、どれも趣向を凝らしたもので、大変楽しかったです。それらを訪問していくたくさんの子どもたち含め、様々なお客さんがいることで、まるでその中に小さな町が生まれているようでした。

実際、うちの駄菓子屋さんではお買い物ごっこをしている子どもたちも多く、他の家に持ち込んで遊んでいる子たちもいたと聞きました。駄菓子屋さんに数１０人の子どもたちが群がったのを見た時は、まるでそこが昭和の駄菓子屋さんの風景のようで感動しました。

家をつくりその場に建てるということが、つくった人にとっても、その場に来た人たちにとっても、様々な広がりが生まれるということに驚きました。

村上さんが提言していた、家ってなんだろう、という投げかけが、シンプルだけど深い言葉だなと感じました。

上條 暁隆（絵画造形教室アトリエさくら 講師）

上條　高校生から小学生の絵画教室。何をつくろうかと話し合って、おばあちゃんが住んでいそうな駄菓子屋さんをつくりたいということになった。富士吉田に残っている駄菓子屋さんやネットで調べたりして、昔ながらの駄菓子屋さんを再現しました。
村上　頑張ったことは何ですか？
上條　駄菓子を紙粘土からつくって、色塗りや袋づめもしたところです。昔の駄菓子さんみたいなあったかいイメージになるように、色や電気の感じをイメージして雰囲気に合うようにつくりました。
村上　駄菓子屋さんのアイデアはみんなが出したの？
上條　そうです。話し合いで。ぼくはそんなに口を出さないようにしました。
村上　今も残っている駄菓子屋があるんだ。
伊藤　だれかおばあちゃんの格好をして、中に座って「いらっしゃい」って。（笑）

K

「ルミエール ル ロジュマン」（宝石のように輝く）

チーム　ジュリア
中巨摩中学校
美術・創作部合同チーム

美術部は軟弱。帰宅部。何もしていない。チームワークなし。中学校に通っている生徒の中で美術部に入っていることを誇りに思える人は何人いるのだろうか。運動部の前で小さくなる、肩身の狭い思いをする。そんな生徒が多いのではないか。表現することを愛し、内なる自分と対面し、共通のテーマに向かって共同でつくり上げることは、そんなにも次元の低いことなのか、否である。むしろ人が人として生きるのに不可欠であり、崇高な行為である。今回の家づくりは美術・創作部が手を取り合って、外に向かう表現を追求する楽しさを分かち合えたよい経験になった。

チームジュリアは、敷島中、白根御勅使中、八田中、若草中、櫛形中の美術部及び創作部の総勢７０人余りが知恵を出し合いそれぞれの学校で部活を通して制作し、南アルプス市立美術館にて、組み立てをして、最後の調整をした。部員の一人一人が輝けるような願いを込めて宝箱のような家をつくりたかった。

この作品のテーマは自然。「家」という中に入れる閉ざされた空間ということで、折り畳みができる屏風形式につくり、外は四季折々の野外の風景、中には同じ季節の夜の風景をえがいた。それぞれの学校で部員たちが創意工夫をこらし、４校が季節、１校は家に住む生き物というテーマで小動物や不思議な生物をつくった。宙に浮いたり、いすに座ったりと家が単なる場所でなく、生活感のただよう空間を演出した。

市川 知都理（南アルプス市立美術館職員・元美術科教諭）

I

手漉き和紙の家

峡南高等学校クラフト科

美術部3年生
遠藤悠菜　小松大介　武藏明日香　市川一道

家のコンセプト
楮を手で打解して手漉き和紙を漉いて作品を制作しています。そのオリジナル紙を使って立体空間をつくれたら、柔らかい不思議な空間に出会えるかと考えました。そこに光や色、肌触り、音までも吸収するような、こころ緩ませる空間を編みます。

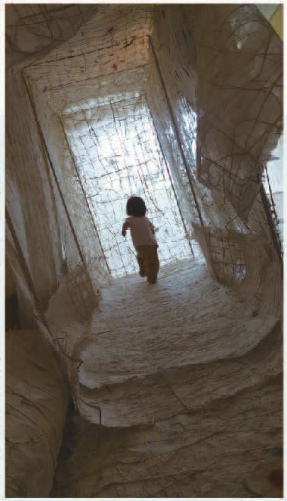
この家を訪れた人ができること
この家で
【何が出来るか】ではなく
【何を感じられるか】の空間です。

「やわらかな光につつまれて」

「美術館に家」ってなに。友人の家具作家が以前「家に合わせて家具を選ぶのではなく、私の家具に合わせて家や住空間を考えてくれたら本当に嬉しい」と言っていたことを思い出した。この企画に美術部クラフト科の4人が賛同した。わたしはこの家づくりのなかでこの4人に何を体験させたかったか。つくりたい家とか空間をまず考え、材料は、つくり方は、道具は、などという建築計画のながれではなく、材料からのアプローチ。また授業で扱っている材料で家に出来る可能性のあるものは何か。「手漉き和紙」がすぐに生徒の口から出た。大判の和紙は楮から打解して漉いていたので、何とかなるかな。いったいどれだけの和紙が必要か、強度を増すための工夫は、以前の楮をさいてラインを入れての流し漉きの経験が生きた。支えは針金立体を制作してきたので大いものを使えばいい。

まず材料からはいって、何が出来るか考えよう。「だから家をつくる」意識をいったん消し去って、手漉き和紙で空間をどうするのかを考え、つくりながらそれを展開させる。設計図のない、完成予想図のないところから始める。家の意識が強いとありきたりの家の説明をしたがる。そういったものを一切使わず説明的なものを置かず、和紙という素材の持つ身体やこころに語りかけるような柔らかさと光に包まれてみることで感じるものがある。つくりながらその都度立ち止まって考える。それぞれの生徒の特技と性格をからませてこのような家になりました。あとは体験した方の感じたものがこの空間を完成させます。

飯野 信二（山梨県立峡南高等学校 クラフト科 教諭）



家見めツアー 7月27日

注釈 コンセプトとしては手漉き和紙のおうちで、この周りを囲っているもの全部が、生徒と先生が手で漉いた和紙です。まず、楮という原料を発酵させて柔らかくするんですけど、そのあとに、打解という作業に入り、柔らかくした繊維をたたいていき、細かくした後に水と練り（ねばねばした液体）と混ぜて漉くことでこの和紙になります。この繊維の一本一本は、楮を割いて一本ずつ並べたものです。この和紙を一枚つくるのに二日ほどかかるんですけど、それを5月ぐらいから始めて今日に至りました。発酵のにおいがきつくて、コバエがたかってきて、においが手にしみて、次の日まで臭って、それがたいへんでした。
中に入って、普段の生活とは違った、和紙で包まれた空間の温かみを感じてほしいです。

村上　この場所（2階　富士見の窓の前）は、和紙ということで選んだのですか。

注釈 やはり自然光の方が、和紙の透け感が表現しやすいと思い、この富士見の窓のところがいいのではということになりました。

村上　いい場所ですね。

J

ブレーメンの家

本杉　琉　（美術家）

家のコンセプト
終の棲み家として、明るく楽しく過ごしていけたらと。

この家を訪れた人ができること
明日を描くことが出来るかも

みんなでつくる活動

何度となく参加させていただいた
みんなでつくる 展覧会、みなび。
地域振興が果たす役割の大切さを
感じています。
制作に参加されていた、ご高齢の方からは
意欲的で、一生懸命に
励む姿に感心させられ、
幼い子どもたちの、なんと楽しげな
様子に嬉しくなったことを覚えています。

夢中になってのものづくり、そこから生まれるものにこそ、価値があり、素敵な作品になるんだなと思わされました。
誰でも参加出来る展覧会がいつまでも
つづきますように、そして、美術館での
活動を記憶に残していきたいと思っています。

本杉 琉

家見めツアー 7月27日

描画に使っているインクは？

これは、ホームセンターで買った絵の具ですが、なんだろう。多分、トールペイントの絵の具です。

村上　農業用のビニールと、描画材の相性がいいです。きれいですね。

僕は、コラージュすることが多いので、色々組み合わせます。

伊藤　この形がユニークで、どうしてこの曲線になったのですか？

ほんとは、もっと大きくしたかったんだけど。設置場所の幅や材料にも問題があってこんな形になりました。

村上　終の棲家として？

そうです。こういう世界観で行きたいなと。

K

「びじゅつ家」を みんなでつくりませんか？

茂井健司（現代美術家）

家のコンセプト

家とは人が生きて行く為に必要な場所。でもみなびの『美術館に住む？』でつくる家は、“みんなの想像や創造が生まれる場”としての美術館の中の家。そこから『美術館に住む？』とは美術館に親しみを感じながら、家をつくることを楽しむことと考えました。みんなで立体絵画空間「びじゅつ家」をつくりませんか？表現の自由さを楽しむ家です。
つくるということは思い、考え、関わりを持つことでもあります。枠（絵の額）をしくみと考えて、みんなのしくみが壁になってさらに中に絵もつくる「びじゅつ家」が、人と作品と美術館をつなぐものとなればと思います。

この家を訪れた人ができること

①木の枠作り
四角形の形や大きさや色は、ここにあるもので自由につくって下さい。
木の枠は絵の額のイメージです。出来上がった枠は「びじゅつ家」の外枠に付けて壁をつくって下さい。
②絵を描く。
「びじゅつ家」の中全体をキャンバスに見立てて、天井、窓ガラス、床などにカッティングシートで自由に切って貼って絵を描こう。

「みなび力（りょく）」

美術館に「住む」？　響きがすごい。そんなこと可能なのか？けど楽しそう。村上さんのトークショーのチラシのコメントは、軽一くけんかを売ってるな、と勝手に思いながら、賑やかし半分で参加させていただいたのですが、、、

WSに無知な状況から向き合い10年ほど。その頃から作品の成立を他者との関わりの中で出来ないかと思うようになり、今回さらに向き合うことになりました。企画は、美術館で「皆さんとつくる」から出来上がっていく家というコンセプトでした。「壁」、「枠」、「制度」、「場所性」などを意識する中で考えました。制作展示中には家の壁の一部が倒壊！！結果、技術的なことの見直しもありました。さらに秋に開催しているオープンスタジオでの作品にもつながりました。今回参加者に制作していただいた枠を再活用し、新たにスタジオでのWSでつくっていただいたものと合わせて制作、展開するに至ったのです。それはまるで点が線になるようにも感じました。そして近年「皆さんとつくる」作品での「強さ」の成り立ちとは何かを考え進めることにもなりました。

今回、家という誰にも共有されるものだからこそ成り立つ豊かな差異性はまさに多様性から生まれていると感じました。そしてテーマと村上さんのアート力が作り出したのではないでしょうか。みなびが点から線。さらに面へとつながり広がっていく場になっています。山梨県立美術館のみなびだからこその今回だと思いますし、多様性を守る大切さを改めて意識するに至りました。最後に制作展示を通じてお世話になった方々に心よりお礼申し上げます。ありがとうございました。

茂井 健司

＊WS…ワークショップ

オープンスタジオでの作品

家集めツアー 7月27日

「びじゅつ家（や）」へようこそ！
参加型の家をつくりました。絵の額のイメージです。額をみなさんにつくってもらいまして、それが、あわさって壁になると。せっかく美術館で家をつくるので、美術館は想像とか創造が生まれる場所だと思っているので、みんながそういうことを意識しながら、美術館に親しみをもって楽しんでつくることを主題にしようと思いました。四角は一つの仕組みで、仕組みが集まって壁になって、かつ額のイメージでもあるので、額の中には絵がある。家の中には自由にカッティングシートで絵をつくってもらって、立体空間絵画というイメージで家をつくってもらえないかなと思っています。
四角い枠が集まって、つながっていって強さももって、形になっていく。風通しのいい家の壁にならないかな。美術館の中のものも遊びに来てます。（シルエットの切り抜きで）角笛を吹く人、種をまく人…その中で、一緒に絵画をつくりませんか？

L

オフトゥンベース

甲府工業高等学校 建築科 建築研究部

家のコンセプト

親や子どもの世代を超えたコミュニケーションを生み、身近にある物で空間をつくることで、美術館という非日常的な空間を温かみのある空間になるよう計画しました。

この家を訪れた人ができること

コマや積み木を使った企画を計画しています。お楽しみください。

「みなび」を通して

今回、「みんなでつくる美術館」に参加し様々な「家」を見ていくことで、違う目線や考え方を知ることができました。成果としては、自分たちで考えた「家」を年代や職業の違う多くの方々に見てもらい、感想や意見、質問をいただくことで今まで見えていなかった視点を知りました。それにより物事を考える上での視野を大きく広げることが出来ました。また、他の参加者の方々や一般の方々との交流を深めていくことで美術館内に独特のコミュニティを形成することができ、「みなび」のテーマを達成することが出来たと思います。

私たちが考えた、「オフトゥンベース」の目的であった『秘密基地の様な空間をつくることで世代を超えたコミュニケーションの場とする。』この目的を達成することが出来て良かったと思います。今回「家」の作成で実際に人が入れる大きさの空間をつくったのは、とても新鮮で良い体験となりました。

「みなび」終了後、ポストに投函されていた手紙や他の参加作品を見て、部員一同とても嬉しく勉強になりました。今後の建築研究部の活動に活かしていければと思っています。そして、今後このような機会があればまた参加していきたいなと思います。

山梨県立甲府工業高等学校 建築研究部

家集めツアー 7月27日

生徒　コンセプトは、美術館は高級感があって敷居が高いじゃないですか。そこで、自分たちは非日常的な空間を身近にあるカーテンでつくりました。秘密基地で子ども心を思い出して、世代を超えたコミュニケーションが生まれたらいいなと思ってつくりました。骨組みは、竹を使い、接合部はゴムで固定しました。

村上　輪ゴムでつなぐことは学生さんが考えたんですか？

生徒　先生方に提案して、いくつか試したところ、ゴムが一番適していました。

村上　組み立ての時間は？

生徒　2時間ぐらいです。材料自体は、下準備で一か月ぐらいかかったんですけど。

村上　何かあれば、すぐ撤収できますね。

M

おやつのじかん

びでかフレンズ

駿台甲府高校美術デザイン科美術部
山本里奈　福本陽太　長谷川凜　高橋はるな
弘内那乃映　伊藤愛樺　中澤一稀
その他美術デザイン科の生徒

家のコンセプト
かわいくて、幸せな空間

この家を訪れた人ができること
中に入って写真を撮ってください。
絵を描いたり塗り絵をしたりして缶バッチをつくれます。私たちがつくった缶バッチももらえます。

「みんなでつくる美術館（みなび）」に参加して

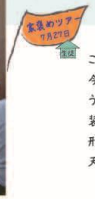
今回のみなびは、美術部を中心にした有志で参加しました。初めにアイデアを持ち寄り、話し合いながらラフスケッチをつくりました。いろいろなイベントで使った廃材を使って基本構造をつくり、そこに相談しながら様々な装飾を施しました。期末試験の後のアトリエで制作したので、面白そうなことをやっているとすぐ集まってくる多くの生徒たちが色々と手伝っている光景がありました。

普段美術を専門に学んでいますが、なかなか自信の持てない生徒が多く、こういった色々なものに関わることで、自信を持つきっかけになっていると思います。

岡田 昭夫（駿台甲府高等学校 美術デザイン科 教諭）

コンセプトなど

「お菓子の家」をテーマに幼い子が喜ぶようなものをデザインし、窓を多く開けることで明るい空間づくりを目指しました。天井に穴を開けその周りに絵を描いたり、実際に動かせるハンドルをつけたりと中に入って楽しめるようになっています。また当日はここで缶バッチ制作も行い、たくさんの子どもに楽しんでもらいました。　山本 里奈（美術デザイン科3年）



この作品は、3年生と2年生でチームをつくってつくりました。今の女子高校生が考える目線でのかわいらしいものをつくろうと思いました。かわいいけど、男の子にもうけるように、外装の形を車みたいにしました。後ろから写真をとると、ハート形になっていて「あーかわいい！」。
天井は、お菓子のイラストです。

N

涼（すず）しいナットウの家

たまご教室

小島大知　安藤 楓　小島大昊　安藤 暖
五味 雫　金山大晟　金山依愛　清水理名
高柳彩恵　早川翔英　梅澤萌華　叶 遥翔
叶 遥陽　石川遥大　内田ちか　齊藤奏介
齊藤香乃　安藤 和　高野慶次朗　小島茉希

家のコンセプト
納豆のフタを使って涼やかな家をつくりました。

この家を訪れた人ができること
夏の強い日ざしをのがれて「涼しいナットウの家」で遠い風の音を聞くことができます。

私たちは、遊んだり、絵や字などが好きな子どもたちのグループです。

「涼しい！ ナットウの家」をつくって

初めの段階で発泡スチロールでできた家をせおって歩き、国内外で「住んだ」美術家の村上慧先生のトークショー映像を見せていただき、そのユニークな作品が励みになりました。「家」について児童書を調べると、歴史、地域、経済、環境によって住む家は様々です。教室では「リサイクルは大事」と地球の環境問題を考えています。捨てられたり回収されたりしているプラスチックの納豆のフタを集めて表現の材料にしています。納豆好きの児童は結構多くたくさん集まります。今回は納豆のフタを使って、家づくりをすることになりました。

この時期は猛暑で雨が急に降りますので軽くして移動しやすくして、木もれ日があふれ、そよ風が吹き抜ける野外に置き「涼しい！ナットウの家」としました。模型をつくり検討し、児童はクレパスなどでたくさんのフタに絵や文字をかきました。工房で家の構造体を木材とプラダンでつくり、そこにフタをはりつけたり、糸につるしたりして、風にそよぎ、涼やかな音がなるようにしました。そこではボランティアさんに多くの作業をしていただき感謝！でした。公開中は訪れた方に、フタに絵をかいて家にはっていただき、涼やかな音色を楽しんでもらい交流しました。ボランティアさんによるバイオリン演奏とのコラボレーションは素敵な時間でした。ポストには、フタを再使用して楽しみたいという意見がたくさん入っていました。野外にも訪問者をもっと多く呼び込みたいと思いました。

田中 静男（書のたまご教室 代表）

地球の卵

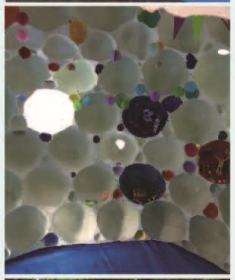
小沢建築工房 スタッフ一同

家のコンセプト

土の中から生まれて来た蟻塚(ありづか)のイメージで昆虫になった気持ちで不思議な空間を体験してもらいたい。

美術館で展示した後は、保育園や幼稚園などで使用したい方がいましたらご連絡ください(みなび案内所に)。

※後日、行き先が決まりました。



家見めツアー 7月27日

うちは住宅の建築の会社でして。工務店として、木でつくることを、みんな想像していたと思うんですけど…木でなくて他の素材でつくろうと思っていたけどなかなか決まらなくて。現場に断熱材を吹き付けているところを見て、これでできないかということで。最初はベニヤに吹き付けて、それをはがすことをしたけど失敗しまして。つぎに、ビーチボールで形をつくってやってみたらできたので、これで巨大なものができるかと思いました。ビーチボールを最初両面テープで止めたんですけどうまくいかなくて、瞬間接着剤で付けました。最後には、全部カッターで切って、つぶして…170個ぐらいビーチボールをつかいました。面白い空間ができたかなと思います。当初は、美術館の入り口から入るぐらいの大きさを想定していんですが、だんだん広がっていって大きくなって、外にしか置けないものになりました。中で写真を撮ると、引っ込んでいるところが、外に出っ張って見えるなど面白いものになりました。

村上 これが終わったらどうするんですか?

幼稚園などでいるようでしたら、そのまま運びます。ほしい人は?また、広い庭がある人はどうぞ。

みなび・ワークショップ 「美術館に心地よい居場所をつくろう」

| 日時 | 7月7日(日)・14日(日)・20日(土)・21日(日)
午前10:00〜午後4:00
7日(日)・14日(日)・21日(日)［美術体験・実技講座］と並行して実施
| 対象 | 幼児〜小学生とその保護者 / ［美術体験・実技講座］は中学生以上
| 定員 | 各日先着5組
| 参加人数 | 77人(延べ)

村上慧さんによるワークショップを4日間(4回)実施しました。参加した22組のファミリーや大人のグループの方々は、「心地よい居場所」とは? 「美術館に住む」としたらどんな家に?・・・について真剣に考え、材料と格闘しながらそれぞれの「家」を制作しました。

ワークショップの1日目の参加者は、大きな段ボール、ウレタン、和紙など豊富な材料から発想し、それらを組み合わせ、迫力のある作品をつくりました。2日目以降は、ペットボトル、牛乳パック、空き箱などが主な材料となり、いっそう工夫が求められました。「できないことはない。サバイバル精神でやろう!」と村上さんに励まされ、知恵をしぼり、材料を組み合わせたり繋げたりして制作しました。試行錯誤、創意工夫、みなびボランティアさんの協力のなかで生まれた個性あふれる「居場所」、「家」たちは、美術館内いたるところに展示されました。(p.7.8 フロアマップ①〜㉒)

※参加者から寄せられた、それぞれの家のコメントや感想をご紹介します。

① けんしょう ロケット・ハウス
／かまくら ロケット チーム☆

7月7日に作成したので、彦星と織姫の所まで飛んでいけるようなロケットを思い描きながらつくりました。

② のんびりサーカス
／里空

のんびりできる家にしました。
あかりとりようのビニールまどをつけました。色をたくさんつかいサーカスのような家にしました。足をのばしてねれるようにしました。

③ ファンシーハウス
／小野寺 りら

おちつけるようにみどりをたくさん使いました。つくるのがたいへんでした。でもすごく楽しかったです。

④ レインボーハウス
／チーム そうた

カベは、空のイメージ
屋根は、虹をイメージ
屋根は開閉できます。
ひっそりと草むらから、ウサギが顔を出します。お姉ちゃんがつくりました。
自分の家で、大きな家をつくることはできないので、できない体験ができよかったかったです。

⑦ いつでもこううんのにじが見えるいえ
／ふじはら なつみ と あつゆき

家の中に空とにじがあるところがポイントです。

⑨ わくわくのおうち
／たつみ なお・たつみ こずえ

やねにわたをつけるところがむずかしかったです。

⑤ プレゼント BOX
／チーム さな

まず始めにダンボールを縫ってつなぎました。屋根は丸くなるように工夫しました。家の中はくつろげるようにナチュラルに仕上げました。
つくりながらアイデアがどんどん出てきて楽しかったです。

⑧ バイキンじょう
／たなかさん と たつみ こうた

バイキンマンがだいすきだからバイキンじょうをつくりました。
外側からは見えませんが、屋根の骨組みとバイキンマンのつのの固定を工夫してもらいました。

⑩ さわやかハウス
／チーム せな

やねをつくるのがとてもむずかしかったです。

⑥ すずしいいえ
／あさくら かける

たのしかったです。

⑪ おしろのいえ
／ひはら やえ

むずかしかったです。

家族のコメント

普段から段ボールを見つけると窓を開けドアを開け、ガムテープで家づくりをしていた娘に、この機会を得たので大人が手伝ってしっかりとした2F建ての骨組みをつくって、娘の夢を広げてやろうと、一肌脱ぎました。
娘も大満足の様子で、夏休みの良い記念になりそうです。

母

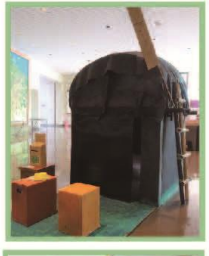
⑫ うみのハートのいえ
／武井渚・綾子

だいすきなうみのいきものをたくさんくっつけました。
あそびにきてね。

家族のコメント

スケッチがハートだったので、それに近い骨組みをつくって、まどや周りには、子どもがつくった魚などをはりました。
海の中に入っているようなイメージなので、よかったら入ってください。

母



⑬ のぞき忍者屋敷型の家
／ソウタツ

おもしろかった。からくり屋敷。上と下で話ができるよ。どこかにかくしとびらがあるよ。
森でごはんゆっくり食べていってね。
みんながわくわくしてつくったので、良い体験でした。

⑭ 黒ぬりカラス吉長城
／吉長 つねやき・慧悟・よしえ・隼吾・ちかこ

そりみたいになっていて、ひもで家をひっぱります。災害がおきて水道が止まったらヤクルトにたまった水を飲みます。色をぬる事が大変でした。雨に強い屋根やかべなどをつくるため、2ヶ月間牛乳パックを集めました。

家族のコメント

屋根に牛乳パック、この裏の段ボールの上にも牛乳パックがあって。ここに落ちた雨水がたまって、飲めます。家を広くしようと思って、広くしました。そしてお城みたいにしました。あと、そりみたいに引けます。

雪がある地域(松本から)なので、冬はこれで移動できます。

村上　松本城のイメージ？松本城が引けるのがすごいですね。

⑮ おうちちゃん♡
／いいぬま たつき

ピンクのおうち！　屋根をぬるのが大変でした。
ハートのまどがお気に入りです。楽しくつくれました。

⑯ からふるのいえ
／いいぬま なゆた

カーテンがひらくようにしました。
えんとつからけむりです。
楽しく一日制作できました。
大満足です。

⑰ 不思議な家　／荒川 野花

むずかしかったです。
かいだんをつくるのが楽しかったです。
いろいろ工夫ができました。

⑲ ちいさいおうち　／なかむら ちひろ

㉑ みんなのいえ　／ Little Bird C-TEAM

（美術体験・実技講座で制作）

テーマは〝やわらかな家〟
壁を弾力に富むウレタンにし、入口と天井は風通しよくネットにしました。
チームみんなのアイデアで誰でも気軽に立ち寄れる楽しい家が完成しました☆

⑱ でっかいおうち　／なかむら そうた

⑳ わが家へようこそ！／チーム 池内家

いつか一戸建てに住みたいと思い親子４人で協力してつくりました。
「ベトナムのバス停」みたいになりました。
「この夏はこの家で一杯やるぞ～!!」
「かくれコナン」と「スポンジボブ」を探してください。

㉒ リユースハウス

（学校独自で制作展示）

／南アルプス子どもの村中学校「ものづくり研究室」

材料は学校の廃材。長年子どもたちが親しんできた遊具に使われていた材木や、木工などで捨てられた木っ端などを利用してつくられました。中学生が骨組み制作し、７月 21 日に清里で開催された「ハイライフ八ヶ岳 2019」の出店ブースにおいて、来場した子ども達と一緒に完成させたものです。

この家の楽しみ方は３つ。１つは家の材料をよく見て、触ってみる。色々な木が使われているよ! ２つ目は壁に貼られている、絵を見てみる。３つ目はハシゴから屋根に登ってみる。上から見る景色はどんな風景だろう!?　安全に楽しんでね。

みなび開催中のイベント

「お部屋を飾ろう！」「綿（わた）から糸へ」「村上慧の映像展」「小さな家大集合！」

わかば講座（旧障がい者のための講座）

| 日時 |　７月 24 日（水）・25 日（木）
　①午前 10：00～11：30　②午後１：30～３：30
| 講師 |　村上 慧 氏、美術館職員
| 場所 |　県民ギャラリー C
| 対象 |　誰でも。　申込不要、無料
| 定員 |　各回先着 70 名程度
| 参加人数 |　315 人（延べ）

「お部屋を飾ろう！」と題し、4つのワークショップを実施.
①白いカード（ハガキサイズ）に楽しく描いてカードを作成し、すでに壁にかかっている好きなカードと交換。（図1）
②白い大きな門のような塔に好きな生き物を描く。（図2）
③窓（アクリル板）、ダンボールの壁面にカッティングシートで装飾。（図3）
④山梨県立美術館の模型を廃材で作成。（図4）
完成模型は、ギャラリーエコーに展示。

ミニワークショップ

会期中、誰でも気軽にいつでも参加できるワークショップ。

| 日時 |　７月 27 日（土）～８月１日（木）　午前９：00～午後５：00
| 場所 |　県民ギャラリー C
| 対象 |　誰でも。　申込不要、無料

「富士山を描く」と、上記①のワークショップを実施。

（図1）

ワークショップ「お部屋を飾ろう！」

（図2）

（図3）

（図4）

ワークショップ

「『つくる』って何？挑戦してみよう！綿から糸へ。」

―講師―
みらいファームの皆さん

「つくる」って何？挑戦してみよう！綿から糸へ

村上さんがトークショーで話された「『つくる』って何？」を受けて、綿花から糸、布になる工程を学び、実際に綿花から糸を紡ぐワークショップを実施。

| 日時 | 7月27日(土)・28日(日)　午後1：30～3：00
　　7月30日(火)～8月1日(木)　午前11：00～12：30
| 講師 | みらいファームの皆さん
| 場所 | 県民ギャラリーC
| 対象 | 誰でも。　申込不要、無料
| 定員 | 各回先着10名程度　見学可
| 参加人数 | 79人（延べ）

みらいファームで収穫した綿

みらいファームのメンバーと共にWS担当をさせていただきました。夏休み中という事もあり、小さなお子様連れの親子が多く参加されていました。会場には、『綿から糸になり布になる』過程を、パネルや展示で紹介しました。「こうして布が出来るんだね」「洋服になるまで沢山の作業があるね」等、感想と共に興味深く見ていただきました。年配の方は「むかし家にも織り機があったのよ」と懐かしそうにお話をしていただきました。WSでは、綿の栽培のお話の後、主に糸紡ぎの体験を行いました。「綿ってはじめてみた！」「ふわふわして♪きもちいい♪」「見て見て糸になったよ！」参加者の皆さんは、思い思いにコマをクルクル回して、何度か切れても諦めずに挑戦していました。この糸紡ぎは糸になるまでの過程。これをさをり機で布にして縫うと洋服になる。生産性が優先される世の中、大切な物は何か？『つくる』って何か？と確認するための良い機会になりました。みらいファームのメンバーは、綿の種取り・ドラムカーダー・さをり織りの実演をし、多くの方に日頃の活動の様子を見ていただけた事が、とても嬉しそうでした。

このWSを開催するにあたり、美術館スタッフやボランティアさんに会場設営から糸紡ぎ用のコマづくり等、WSに綿のいとなみ『わわわのわ』の皆様にお手伝いをしていただきました。この様な機会を与えていただき感謝致します。ありがとうございました。

＊WS…ワークショップ

青柳　一美（(福)さかき会みらいファーム 職員）

「村上慧（さとし）の映像展」

「村上慧の映像展」 村上氏の活動と映像を紹介

| 日時 | 7月27日(土)～8月1日(木)　午前9：00～午後5：00
| 場所 | 県民ギャラリーC
| 対象 | 誰でも。　申込不要、無料

プログラム

1　台湾、宜蘭にて行われた「Action for Education」のワークショップの様子（作成：City Yeast）5分51秒/2018
2　《Smoking Democracy 2019年7月1日版》5分28秒/2019
3　《移住を生活する/Living Migration 釜山、金沢》12分/2018
4　《住所に生えているケヤキ》4分33秒/2018
5　《清掃員村上3》(再編集版)　3分19秒/2017
6　《清掃員村上2》(再編集版)　3分18秒/2013
7　《清掃員村上》(再編集版)　3分26秒/2013

《歩くとき》

《寝るとき》

絵：村上 慧

映像は「村上家」の中に設置したプロジェクターからから映写されました。

「小さな家」大集合！

「小さな家」募集！

|小さな家のルール| 1. 大きさ　30×30×30㎝　以内
　　2. 生物は使わない。(動物、生花、水、土、食品など)
| 搬入 | 7月27日(土)または28日(日)　午前9:00～午後4:00
| 展示 | 7月27日(土)～8月1日(木)
| 場所 | 県民ギャラリーC

ペットボトルを利用した家、これからつくりたい家の模型、3Dプリンターでつくった家など工夫を凝らした家が集まりました。

村上さんと美術館に泊まった(!)

| 日時 | 2019年7月26日(金) 夜 ～ 27日(土) 朝
| 場所 | バックヤード

今年のみなびのテーマは「美術館に「住む」?」。そこで自分たちがつくった家で、みんなで美術館に泊まろう･･･残念ながら、この計画は実現できませんでしたが、今回は、村上さんと当館学芸員の小坂井、みなびスタッフの小俣の3人が、美術館のバックヤード(事務室前の通路)に「家」を置き、その中で一晩泊まりました。

閉館時刻が過ぎ、ほとんどの職員が帰宅した午後6時からの3時間、村上さんの提案で、それぞれ自由に過ごすことにしました。午後9時。再び美術館学芸室に集まり、何をしていたのかを互いに報告。村上さんは、美術館の近くの銭湯と食堂に行ったそうです。午前0時。通路の好きなところに、村上さんは高校生とつくった「家」を、小坂井は村上さんの「移住を生活する」の「家」を、小俣はボランティアさんがつくった「家」を設置して寝ました。

次の朝、美術館に泊まった感想を語り合いました。村上さんのプロジェクトのこと、これからのみなびのことなど話題はどんどん広がっていきました･･･。その報告をします。

小俣が泊まったみなびボランティアがつくった家

村上氏が泊まったインターンシップの高校生とつくったキャンバス地の家

7月27日(土)

AM6:30　宿泊体験について

小俣:(泊まった家について)つくった人の愛情を感じました。寝転んで見上げたときに、天窓から光が透けて、いろいろと空想させられた。

村上:何か、気になったことはなかったですか。

小俣:館内はいろんな音がしました。警備員さんの気配が感じられて、だれもいないと、そういうものなんだなと思いました。

村上:あの家には壁がないじゃないですか。それは大丈夫でしたか。

小俣:右側と頭の方は廊下の壁だから、特に気になりませんでした。

村上:職場まで、徒歩何秒か、ですよね。

小俣:3秒でした。

村上:小坂井さんはどうでしたか。

小坂井:暑く感じたので窓を開けたらすごく風が通って。窓って大事なんだな。足を家の外に伸ばす構造になっていていて、足をなでられたらどうしよう、足をもっていかれたらどうしよう、ややドキドキしながら最初過ごして･･･。ああ、夜ってこういうもんだったんだなって。結局6時半ぐらいまで家にいて、他の職員の方が6時ぐらいにいらっしゃって、いろいろしゃべりながら見学されているので、見られる動物の気持ち･･･。

村上:そうですね。動物園ですよね。あれも、独特ですよね、あの感じ。「ここで寝てるの?」

小坂井:そのとき、顔出せないじゃないですか。

村上:中にいないふりします。

小坂井:やり過ごすしかない。

村上:あの見世物感はすごいですよね。

小坂井:独特の緊張感がありますよね。何か少しでも動いたら･･･

村上:敵にばれるみたいな。僕は普段、寝袋に入ってるから、裸で足が出ることないんで、裸で出てるのは、かなり衝撃の絵です。

小坂井が泊まった村上氏の「移住を生活する」の初代家

AM7:00　「美術館での宿泊」※内部検討課題一覧表を見て

小坂井:ざっと見ている感じ、後ろの方(の項目)が面白いですね。なんか。普通の考えからすると、「宿泊実施は美術館にとってメリットはあるのか」とか、「新しいこと珍しいことは大事なのか」「なぜ泊まることが美術なのか」とか企画の概要、根幹の部分が80番目の質問にきているというのが、この壮絶さを物語っていますよね。

村上:しかも、「保険に入るのか」とか等価に並んでいるのが、興味深いですよね。

小坂井:美術館のセキュリティを守る側の立場と、使用する立場の利害関係の衝突が具現化していますね。村上さんは、どんな感想もたれましたか。

村上:僕は単純に、こんなに頑張ってもらって、僕も頑張ろう、ちゃんとやろうと思いました。この他にA4の企画書を見せてもらったんですけど、あれもスケジュールがかっちり決まっていて。僕は何百回もやっていることだから、時間を区切っていて、林間学校みたいな感じになるとは、想像しなかったですよね。でも公にやるとなったら、こうなるということに気付いた。生活を前もって想定していく作業って、なかなかしないじゃないですか。明日何時に洗濯物を干してとか。決める人いるのかもしれないけど、何時に起きて、だれがご飯を買いに行ってみたいなのをわざわざ紙に書くことは普通やらない。でも、実施側からすると、とても非日常なことをやるわけだから、それは当然なことかもしれないけれど、本当は、全部想定して前もって予定組むなんて無理じゃないですか。

※「美術館での宿泊」内部検討課題一覧表:家制作者が館内設置の自作の家に宿泊する際に想定される課題点(97項目)を列挙し、個々について対処方法を表にした。

M7:30　生活／スケジュールについて

村上:僕は、生活することって水みたいなもので、どんどん床にまかれていく。それが無秩序に床に広がっていく。それをどうにか、いろんなもので広がりすぎないように常に留める、と考えていて･･･。洗濯するとか掃除するとかご飯つくるとか、ごみをちゃんと捨てるとかってことを通して、その許容範囲は人によって違うんですけど、何らかの秩序立てることをどこかに挟んで、「秩序と無秩序」というか、「生活と秩序」のバランスをいつも取っている感じがするんです。それをこういうところでやろうとすると、流し素麺みたいに、水路がきまった状態を用意しなくちゃいけないのかと思う。でも、それはやりすぎると面白くないな。そのバランスのこととか考えましたね。何時にみんなで買い出しに行って、同じお風呂に何時に行ってとか、決めすぎると、昨日みたいな(どうやって過ごした、という)話にならないじゃないですか。

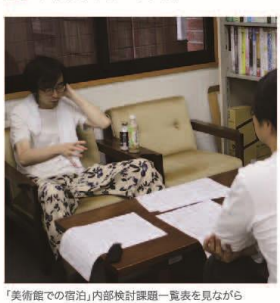
小坂井:そういうことで、自由時間を提案されたんですか。

村上:これにあたっては、一人になることが大事だと思って。普段、一人になることもそんなにないから。時間を与えられることってそんなにないじゃないですが。本当はそういうことは起こっているんだけど、気が付かない。気が付いたら時間が経っている。

そういうときに何を選択するのか、しかも同じ町で。それを後で話すとおもしろい。町の見え方も人によって違うし、どこに行くのかも違うし。そういう意味では集団でフィールドワークをする、リサーチをするような感じです。だから、流し素麺みたいに全部タイムスケジュールで決めると、ワークショップの意味がないと思います。

小坂井:この泊まったことをワークショップと考えたときに、今のポイント、「宿泊前の3時間をどう過ごすのか」については、最初の予定だと、･･･食事をとる、ここでお風呂に入る、何時に戻ってくる、交通手段はこうで･･･という決めごとがあったけど、それがなくなった。それがあったときにはどうなったんだろうと、想像してみると･･･。

村上:それは興味深いですね。



「美術館での宿泊」内部検討課題一覧表を見ながら

小坂井:一人一人が過ごす時間の模様を持ち寄って話し合うことを、昨日の夜やったじゃないですか。泊まるという一連のことで、三軒の家の住人になれた気がしたんですよね。

一つの村の村民。一つの家に住む家族ではなくて、おのおの家があり別々の生活をしているけれど、この美術館の中にある村で顔を合わせるみたいなアナロジーが思い浮かんできた。個人の時間とか寝る時間、個人のスペースがある。だけれども、緩やかに大きくみんなで同じ時間を過ごしている。

村上:そうですね。今回、通路の全部違うところにポジショニングしていましたよね。

小坂井:あのポジショニングは一人で過ごした時間を反映しているような感じがしますね。お風呂も一緒に入っていたら、三軒並べたと思うんですよ。

村上:並べていましたよね。

小坂井:でも実際には、距離感をとりましたよね。振り返ってみれば、そういうところがあるかもしれないですね。見事に、家から家が見えなかったですよね。くねくねしている廊下の特性もあると思うんですけど。

ワークショップでつくった参加者さんの家は、会期終了後に自分の家に持って帰って、みんな、それぞれ、設置して住んでみてほしいですね

村上:そうですね。寝てみてほしいですよね。

AM8:00　ワークショップ／所有について

小坂井:今回のみなびは、「一般参加者の方が、村上さんとコミュニケーションをとりながら家をつくる」ということですよね。

村上:「実際に家で過ごす」というところまでですね。今日から「家公開」が始まりますけど。

小坂井:子どもの立場で考えると、家って、そもそも自分のものなのか、という問題がありますよね。自分の部屋がない子どももいるし。

村上:僕もなかったです。今和次郎が、「子ども部屋不要論」の中で、「子どもは、大人の間を走り回って、勉強も、台所でやったり炬燵でやったりすればいいし、そういう存在でいた方が、家庭内で駆け引きがあるからコミュニケーションもとれるようになる」ということを書いています。自分のことを思い返しても、宿題をするときに、いつも誰かが近くにいてなんか邪魔だったり、他者の存在がありました。でも、それが今思うと、何かにつながっている感じはあります。

僕の今回のワークショップの趣旨は、ワークショップ室でつくった家を外に持ち出して、人に触られたとか、他人が自分のところ(家)に入っていたとか、そういうことを起こしたい。

それを公の場所でやるっていうのが多分大事で、安全圏の中にいて、「この部屋の中でつくっていいよ」といわれたところでつくって「それで終了」では、ただ自分の空間を安全な場所に広げただけで、面白くない。そして、「泊まる」というのは、部外者としての自分が、公共空間の中に介入していく、みたいな

意味です。一晩だけのシェルターで。家をつくる、つまり自分の空間をつくりつつ目指しているのは、「他人と同じところにいること」なんですよ。だから、そのために、一回家を介する。僕のプロジェクトもそうなんですが、僕は別に一人で生きていきたい訳じゃなくて、自分のあの家をとおして、居場所を見つけていきたいというか…。

小坂井：近代的な家は、家族、個人なども区切る、隔絶するものはずなのに。村上さんの家、また今回WSで制作された家は、外とのコミュニケーションを前提としていますよね。所有と関係するのが、作品に「触れる」という問題ですよね。触れることで作品とコミュニケーションをとる。自分の所有物ならば許されますが、美術館に「展示」されているものの場合はそうはいかない…。でもそもそも、美術館の作品の所有者って誰なのか…。

村上：そういえば、「作品（家）に触らないでください」という表示はどうなったんですか。

小俣：家に作者やボランティアが「いるとき」と「いないとき」で区別しようと考えています。「触らないで」というシンプルなメッセージじゃなくて、ちょっとバリエーションを工夫しているところです。

村上：「中をのぞいてみてください」みたいなのがあるといいのかなと思いました。

小俣：準備中は、「触らないで」という表示をつけています。来館者が、家を触ってもいいのか、触ったら注意するのか、ということを美術館の監視の方が困っていて…。

村上：そういう問題にもなってきたんですよ。最初、「作品に触らないでください」というサインが置いてあったのですが、ちょっとこれは強すぎるなと思いました。でも、管理の人は、触らせないのが仕事だから、どうしたらいいのか…。そのあいだのニュアンスをどうするか。

究極的には、今回展示する家も、つくった人のものじゃないんですよね。

小坂井：その点を詳しく聞かせてください。

村上：あの家で寝泊まりしてきたことを考えると、あの家が僕だけのものだとも思っていないんです。今度、モンゴルに行くんですけど、あそこは全部国有地だから、基本的に必要なときに必要な人が必要な場所を使えばOKっていう感覚がまだ残っている。そういう気持ちをまず忘れてはいけないなと思う。必要な人が必要な場所を必要なときに使うべきだと思うんですよ。感覚的にそうあるべきだと思うんだけど、それだけだと不都合があるから、所有権というものを作って、「使ってないときも俺のものだ」っていうことが、一般化されているじゃないですか。でもそれはルールにしておこうっていう、おままごとみたいなもので、でも本当は必要な人が必要なときに必要な場所を使うべきだと思うんですよね。それを忘れて、使ってないときも「俺のものだ」という感覚が、地のものになってしまうと、ちょっとまずいなと。なんでまずいかはわからないんですけど、なんかよくない気がするという感覚があるんですよ。お金と同じだと思うんですけど。話が飛んでしまうかもしれないけど、お金は、基本的には交換するもので、お金そのものには価値はないじゃないですか。交換した瞬間にだけお金が価値を帯びる。でも、お金（自体）を信用してしまうと何かを見失う気がする。それと近いものがあって、（盲信的に）所有権とか主張してしまうと、馬鹿じゃないのという感じがあるんですよね。それを忘れてしまいたくないという気持ちがあるので、そういう意味では、僕のプロジェクト、人の敷地を借りていくっていうのは、そこを意識しているというか、ちょっとずつみんなに迷惑をかけていこうと思っていて…。

まず「これ（家）の置き場所にめっちゃ困っている」という状況をつくってしまうということによって、「俺の敷地だけどいいよ」みたいな感じ、というのがあるんですよ。だから、そういう意味で僕の家で寝られているのも、僕が持っているからっていうよりも、僕が必要だからそこを借りて寝ているだけというか…。（家という）物体がだれのものかが問題じゃなくて、空間が、空間に豊かさがあると思うんですよね、そのときのその空間が満ち足りているかが僕は大事というか、自分の空間だっていう瞬間が大事だと思います。

小坂井：村上さんの家は、その土地を所有している人に対して許可をとるっていうプロセスを踏みながら、その場所を占拠することを通して、なんとなく無意識的に所有していることを相手に気付かせるような手順を踏んでいるじゃないですか。契約書は交わさないまでも。占有している人に「お願いします」って丁寧にお願いをしながら、プロジェクトを通して訴えようとするところ、村上さんの問題意識とかを、言葉ではなくて感覚として相手に植え付けて帰っていく。とんでもない外からの闖入者ですよね。その村上さんが美術館にやってきた（笑）。

村上：美術館でワークショップという話をもらったときに、これを美術館でやればいいなと思った。僕は部外者なので、侵入していって、しかも、色々な人を呼び込んで、講師としての権限を使って。色々な人を呼び込んで…まさにこういうところに現れていると思うんですけど、美術館という箱の所有感をぐちゃぐちゃにしていくというか…。

小坂井：講師という立場、アーティストという立場で…。

村上：「みんなで泊まればいいじゃないですか」とか言って…。

小坂井：みんなで泊まるということは実現しなかったけれども、所有に関する問題意識を共有しようという方法を徹底的に考えようとする中で、「みんなで泊まれば」が出てきて、このExcel（課題一覧の表）にあるような交渉を経て、結果的にはできなかった。けれど、目的意識として、こういう所有とか住むに関する意識を揺さぶるってことに関しては、期せずして、（美術館の「管理」を担当する）総務課の職員も含めて、我々美術館職員の意識が揺らぐ部分があったと思います。

村上：これを知ることで、美術館の印象は良くなると思うんですよね。この辺の経緯と僕が考えたことをちゃんと参加者と共有はしないと意味がないなと思っています。

AM8:30 共同体／町について

小坂井：先ほど出た遊牧民の話や、自分の家であり自分の家じゃない、という話を聞いていたときに気になった点があります。使いたい人が使えばいいんだけど、例えば牧草が、全部なくなる状況ってのは「使いたいときに使えばいい」の原則を崩すものになりうるから、まずい訳ですよね。個人の話から、共同体、そして全体への配慮、社会のルールという話だと思うのですが。日本の共同体って、所与のものになっていて、意識して考えたり、意識してつくったりあまりしていない気がする。一方でスウェーデンとかドイツも言葉でつくっていこうとするじゃないですか。村上さんは海外で生活をするワークショップをされ、一方で、日本で全国を行脚して、やり取りをして、差とか感じたことはありますか。共同体という観点から見たときに。

村上：金沢21世紀美術館の「東アジア文化都市2018金沢」の展覧会の枠組みで釜山に行ったんですけど、釜山現代美術館がかなり全面的に協力してくれて、僕のプロジェクトを、釜山現代美術館の企画として一か月間、町中で、僕の移動生活の様子を展示するということをしてくれました。そのときに、博物館とか市役所の駐車場とか公園をずっと寝泊まりして歩いたんです。敷地の交渉は美術館の人が電話してくれて、「東アジア文化都市というのがあって、公共事業で、美術館が協力していて、日本からアーティストが来ていて…」みたいな話をして、「お宅の敷地は公共施設だから泊まらせるべきだ」と言ってくれた。それでずっと、ほとんど公共施設を移動していました。僕は歩いて絵を描いて寝るっていうのをずっとやっていただけで。

小坂井：ユートピアですね。

村上：そうですね。でもね、日本では、そんなこと起こんないですよ。役場にも僕は何回か交渉したことがあったんですけど、個人ベースで僕がやっても絶対ダメなんですよ。公共の場所だからって言われて。でも、釜山でできたから、金沢でもちょっとやってみようと思って、美術館の人に「市役所の駐車場に一晩寝られませんか？」って市役所に電話してもらったら、「許可をとらなくちゃいけない部署が想像できない、どこに許可をもらえばいいのかわからないから無理だ」という話になって。そういうわけで役場とか全然寝られないんですよね。韓国はもしかしたら…東アジア文化都市という公の事業主体があって、そこで行われていることに対して一市役所の人間が、「泊まっちゃだめだ」なんてことは言えないんじゃないという心理もあるのかもしれない。あるいは、韓国の人は公園を自由に使うんですよね。おばさん…アジュンマたちが、太極拳みたいのものをやっていたり、夜中までずっと、騒いでいたりするんですけど。

小坂井：近隣の方に迷惑をかけないように、ていう看板はないわけですか。

村上：ないんですよ。僕もすごい迷惑しましたけど、公園で寝ているときはドアを壊されたりとか。だから、「好きにやっていけど、なんかあっても知らんよ」っていう感じがある。そのへんは明らかに日本の空気感と違いますね。スウェーデンに行ったときに…共同体の話とは違うかもしれないけど、家の外壁をペンキで塗りなおしているんですよね、週末とかになると。僕が泊まったところも、年に一回気分を変えるために色を変えている家が結構あって。外壁を塗っている人なんて、日本では見たことない。沖縄でも、自分でやっているところもあるんですけど。母親が沖縄出身なので、叔父（伯父）の家へ行くと伯父が自分で壁を塗ったり…。その辺のメンタリティ、沖縄人は強い。東京とか、日本で自分の家を塗っている人を見たことないです。多分、家を消費財としてしかみていない。家の外面まで自分のものだって考える意識が低いのかもしれない。スウェーデンの住宅って、通りと庭と外壁とインテリアが、地続きになっている感じがするんですよ。中に外が入ってきている感じもするし、外に中が入ってきている感じもする。

小坂井：共同体の話につながりますね。

村上：外壁を塗るというメンタリティがどこから生まれるのかということと、同じ家に統一するということは多分近いと思うんです。壁を塗る気持ちになるっていうのは、自分の生活を外から見ているという意識が多分あって、それが、町の景観を自分たちでつくっていこうという意識に多分つながっているし、それがスウェーデンの社会包摂感をすごく強めていると思うんです。自分たちで生きている感じ。エレブルーのちょっと郊外に行くと、超広い庭がある家がいっぱい並んでいて、犬を飼っていて、芝生で、ユートピアみたいな、楽園みたいなところに住んでいる。庭で過ごすことが多分多くて、自分の家を外から見ることが多いんですよね、日本人よりも。日本人は自分の家を外から座って眺める場所なんてないじゃないですか。せいぜいベランダにでて外を眺めるくらい。そういうところで外壁を塗る気にはならないし。日本は庭とか広場みたいなものが極端に少ないから。もう少し広場とか公園があれば、自分の住んでいる建物とか落ち着いて眺める時間がつくれると思うんです。スウェーデンを経てから思うと、道路からいきなり居間みたいな感じがしました。僕の実家は、公園沿いに建っていて、父親が植物が好きで、モッコウバラを公園沿いに植えて、それがある時期になると黄色くすごくきれいになるんですけど、ああいうことがもう少し起こると、それが共同体意識につながって行くのに、空間に余裕がないから…行政が個人がみたいな話になるのかなって思いますね。

小坂井：また、共同体的なものには、ある種、調和への力が生まれますよね。みんなの居心地のよさって考えたときに、どこのレベルで、合意を形成するかというのが、共同体ごとに違うのだと思うんですけど。

村上：エレブルーに行ったときに…そこは似たような家が多いんですけど、名物的な給水塔があって、そこが展望台になっているので、ある夫婦にそこに車で連れて行ってもらった。

通り掛かりに、最近できたある会社のオフィスビルがあって、それを見て夫婦が、「これは好きじゃない」って言っていたんですよね。「全然この町にふさわしくない」って。ガラス張りの近代的に建築なんですけど。すごく嫌悪していた。ある種の同調圧力なんだけど、人と違うからだダメだ、ではなくて、「これはこの町にふさわしくない」という言い方をしたのが、肝かもしれないですね。こういう考え方が、(その地域で)共有されているんですよ。

小坂井:歴史性だったり、地域性、文化、自分たちの生活が連なっているっていう意識があって、それに破綻をきたすもの、配慮がないものについて批評するってことなのかな。きちんと批評公理、共有されうる理由がある。

村上:「この町じゃなくなっちゃう」ということなんですよね。誇りをもっている自分の町じゃなくなっちゃうことが嫌なんだろうな。それは、よくわかるな。

AM8:30　今後のワークショップについて

小坂井:話は戻るんですが、みんなで家をつくって、この場所に設置するっていうときに、「隣の人が何つくっているから、俺は何つくろうか」という交渉って、でてきたんですか。

村上:たぶんないです。お互い何をつくっているのか知らないので。順番につくっていけば起こるかもしれないですけど。ギャラリーCを出て窓際のところに集合住宅みたいなものがあるんですけど、保育科の学生が2人1組で1軒つくって、それが6軒集まっているんですけど、入り口同士がつながったり離れたりする構造になっていて、迷路みたいになるんですよ。(p.12家D)

小坂井:モジュール?

村上:そう。ユニットになっていて、組み合わせで、ある場所が行き止まりになったりとか、窓と窓が接したりとか。それを子どもが遊び、しかも、子どもが動かせるという。

小坂井:それを考えたのは先生?

村上:そう。(山梨学院短期大学伊藤)先生。よくできているなと思って。最初の家を2人1組で、というところから始まっていて。そういうことが全体で起こるともっと面白いのかなと思いました。1軒ずつ家にしたけど、例えば通路みたいなものをみんなでちょっとずつ継ぎ足していったりとか、分岐したり、行き止まりにする人間が現れて…。あと、穴をあけて文字をつくる人とかいたらいいのかもしれない。いまはバラバラにやったけど、順番に一つのものに継ぎ足していくようなやり方でももしかしたら面白いのができるかもしれないなと思いました。

小坂井:ステップとして、今はまず、家を、自分の個人のスペースを公の場所に設置するという文脈の中でやってみるということですね。今度は村を…

村上:本当はそこに行きたいんですよね。仮設の村を出現させたい。一夜でもいいから共同体にしたい。

小坂井:特定の「美術館」のルールや、文脈に配慮しながら家を、そして共同体を形成するというプロセスは、とても面白そうですね。

村上:今回、基本的にバラバラにつくったものを同じ場所に持ち込むやり方だったけど、次は、中・高校生ぐらいを対象にしたワークショップとして、今できたものをどうやって関係づけていくかということができるかもしれない…。道をつなげてみたりとか。そういうことは小学生では無理なので。高校生ならできるかもしれないな。家もそうなんですが、道も面白いと思っていて。地図という状態というか。

小坂井:地図のドローイング作品も、村上さんは制作されていますね。

村上:あれも近い。僕は散歩が昔から好きで、高校生のときに、ご飯食べた後に2時間ぐらい散歩していたんですよ。ずっと歩いていると、明らかにいつもと違う景色になるんですよね、同じ町なのに。歩くルートとそのときの気分によって、自分の町ができていくんです。同じ空間なのに違うものが出現するというか、それがかなり面白くて。今回は美術館に家をつくり、それぞれの家が、スタンドアロンしている状態なんだけど全体として異様な感じになってきてる。今度はそれをもっと明確に、(スケッチを指しながら)こういう四角い場所が与えられて、既存のルートが決まっているところに、同じ空間なんだけど、こういう(別の)ルートも出現させられるような…。

小坂井:具体的にはどんなかたちが可能でしょうか?

村上:むかし、作品プランで考えたことがあるんですけど、(図に描いて)例えば、ある建物の入り口からトンネルをつくって、その建物の中へつなげるんですよ。ずっと入っていくと…つまりその建物に入るんだけど、トンネルの中なので入ってるのに入ってないような状態になって、そのまま出口から出ちゃったりして。その通路から建物の内部が見られる状態になっている。…これは散歩に近いなと思って。これは極端な話だけど、同じ空間で別の歩き方を誘導するようなワークショップもありうるなと。今あるを家をつなげていくだけでもいいかもしれないし。

AM9:00(開館時間)

小坂井:オープンしましたか。

小俣:お客さんが、ガンガン入ってきました。

村上:次やるとしたら、中高生向きの、今回ボランティアできていたような、彼らにワークショップをやらせたい。小学生がつくったものを、少し上の世代がどのようにつなげて、関係性をつくっていくか。今回バラバラにつくったものが集まってなんとなく全体性が生まれてますけど、それをもうちょっと意識的に。小学生がやったものを高校生が面倒をみるという構図もつくれるし、今回、高校生がワークショップを手伝っているのを見て、お互いにいいなと思ったんですよね…。

(編集:小俣直喜)

「家制作者と村上さんが語る会」

| 日時 | 2019年7月27日(土) 午後3:00〜
| 場所 | 講堂
| 進行 | 副実行委員長 伊藤 美輝

村上さんと「家」制作者、来館者の方々と「家褒めツアー」(p.6)で家をまわったあと、講堂で座談会をしました。

伊藤:村上さん、まずは「家褒めツアー」のまとめをお願いします。

村上:僕は「家をつくろう」とはあまり言わないようにしていて・・・。「自分の場所をつくる」かな。僕自身が、家という言葉に食傷気味なところがあるので…「家の人」みたいになっているので(笑)。(みなびで展示した)家というものを通して、それぞれが自分の作品の発表の場にしていたりとか、コミュニケーションをとるような作品をつくっていらしたりとか。家は人間が住むためのものなんですけど、子どもの家はどこか開いていて、美術館に置くことを前提としていたから、閉じていないですよね。参加者が入り込める仕掛けがあったり。みんなそれをしていたので、面白かったですね。家っていうものを通して、むしろ場を開いていくことをみんな考えていた気がしました。

伊藤:村上さんが家をせおっている映像を見て思ったのは、(人が)家の中に入っているんだけど、開いた思いで歩いている。本来家は、ドアを閉めちゃえば自分だけの空間なんだけど、持つことによって開いて歩いている。こんなに開いて歩いている人っていませんよね。

村上:今回のワークショップで結果的にできたものに似ているんですよね。僕は、自分の家を通して一人で生きていくなんて思っていない。最初から人にたよる、もっと言うと、少しずつみんなに迷惑をかけていこうと思っているところがあって。一人で生きている人なんていないんで。今回ワークショップを企画したのも、家を通して、人と関係性を結ぶような場所にしたかった。美術館を自分の場所として考えてほしかった。公共施設なので。公共というのは、自分の力でつくっていくものなので、その辺の考え方が、日本は弱いところがあるんですけど、自分一人の力で、みんなの公共空間をつくっていくというワークショップがしたいなと思って今回美術館を乗っ取るという裏テーマがあったんです。30軒、40軒並ぶと、普通の来場者もどこに行けばいいのかわからなくなる。道に迷ってる人、いましたよね。(笑)

伊藤:路地の中に入りこんでしまった。(笑)

村上:みんなで新しい自分の場所を、すでにあるものの中につくっていくことができたらなと思いました。本当は、その家でみんなで過ごして、どんな夜を過ごしたのか、この場で話せたら面白かったんですけど・・・。秘密の資料です。みんなで泊まる企画を実現するときに想定される課題点が97項目あります(p.31)。「ご飯をどこで食べるのか」「参加者の寝具をどうするのか」に対して全部書いてある。これもすでにすごい成果です。全員で泊まることは無理だったんで、僕と(学芸員の)小坂井さんと(みなび担当の)小俣さんで泊まりました。6時から3時間自由行動にして、9時に集合してから、家の設置場所を決めて・・・。

以下スライドとともに

(図1)

雨宮:これ(図1)は小俣さんが泊まった家ですね。

小俣:ボランティアさんがつくりました。

伊藤:これは、裏(学芸室前の廊下)ですよね。

村上:普通こんなところに留まらないですよね。でも、これが置かれただけで一気にこの空間が人間の場所になった気がします。

(図2)

伊藤:小俣さんはこれに寝た?

小俣:ぐっすり寝ました。

伊藤:これ(図2)は小坂井さん。

茂井:体は収まりましたか?

小坂井:足が出せる構造になっていて。あれ(図2)は学芸課長の足です。

村上:久しぶりに初代の家を引っ張り出したんですけど、よくここで一年間すごしたなと思いました。

一番小さいんですよ。

雨宮:私が朝来たら、足は出てなかったですよ。

小坂井:寝返りを打ちたくなって、2時ぐらいに起きて。だんだんと寒くなって。発砲スチロールなので断熱しっかりしているので、基本は暖かいんですけど。

村上:携帯の電波が、ここ(館内)は全然入らないですよね。それが良かったです。

(図3)

(図4)

これ(図3)は、僕とボランティアの高校生がつくった(図4)キャンバスの家です。きのう(21時から6時まで館の出入り禁止だったので)閉じ込められていたから、朝起きたときすごく気持ちよかったですね。

小坂井:美術館の中は、温湿度が比較的一定に保たれるようになっていて、ずっとそういう環境にいると、つらくなって風に吹かれたくなる。外に出た解放感はすごかったですね。

村上:「こんなに葉っぱってきれいだったんだ」(笑)

小坂井:恋人の会話みたいに「夏の朝っていいね」(笑)

村上:今回、3人で泊まって、夜は、お風呂(銭湯)に行った話とか、「花小屋」という居酒屋がよかったという話をしてから寝て、次の朝「おはようございます」というあいさつすると、この3人の関係は昨日とは全く違うものに・・・。

小坂井:家族ですよね。

村上:一緒に寝るっていうのは、そういう力があるから、今回はもう少し人数を多くして、ワークショップの参加者も入れて、全員で一つの村みたいな、共同体みたいにすれば、忘れられない体験になったかなと思う。・・・僕も忘れられないですね、この体験は。

伊藤:Mt. Fuji Projectさん(p.10)で、早速これをやってもどうですか。屋外に、自分たちのテントをつくって。

Mt. Fuji Projectスタッフ:面白いかもしれないですね。もともと我々は泊まるワークショップなので。

鎌上(Mt. Fuji Project):生活を一からつくっていくということが最初にあったんですけど、何もないところから家をつくるのはなかなか最初は難しいので、空き家を借りて。空き家を素材に始めていたので、それができれば実際に近づくので、今回すごく楽しかったですね。美術館の中が町みたいになっていたじゃないですか。驚きました。理想の形を見せてもらった感じです。

伊藤:それぞれの主張しているものがあって、町ができている、つくられた町に行くんじゃなくて、自分がつくった町に行くという。

鎌上:村上さんの町に見えました。

村上:僕の町?(笑)

伊藤:今回は、村上さんの行動が刺激を与えてつくっていたので、村上さんが親なんだろうね。

村上:お父さん?(笑)

小坂井:泊まる計画については、最初は、3人でお風呂に入って、食事をして、3人で戻ってくるプロットだったのが、村上さんが直前で、「別行動にしよう」と提案したんです。それがどういう結果に結びつくか分からなかったけれど、迎えた朝の会話の中で、「それは家の配置に影響したよね」という話題になった。もし、一緒に背中を流し合っていたら、家族みたいに、家が寄り添っていただろうと・・・。

村上:3つの家が、それぞれが見えない配置になったんです。

伊藤:互いに、コーナーで隠れているから。

村上:その辺は無意識ですね。

小坂井:連帯感はあるけど別の家の方(かた)、のような・・・。細かいけど本質的なことが変わったんじゃないか、という話が村上さんから出たのが面白かった。

村上:それぞれ別々なんだけど、同じ空間にいるという状態が、とても豊かだと思うんです。

伊藤:今日、工房でお昼を食べながら思ったのは、片やこっちではつくっている、こっちでは食べているという様子が、大きな家みたいで面白かった。生活がここにあって、そこでいろいろなものが生まれてくる。本来美術館にはそういう発想はないわけで、見に来る、参加に来ることはあっても、そこで生活することはないのだが、今回、家をつくることでそれを感じられた。

小坂井:追加の駄菓子をつくっていた子がいたのは衝撃的でした。

上條:うちの子ですね。(p.15)

小坂井:買い物ごっこしていて、足りなくなったら注文が来たりして、面白かったです。

上條:「私これつくってきます」って言って工房に行って。仕事を自分でつくっていました。

伊藤:あの姿を見ると、基本的にはここで仕上げをして、みんなが刺激を受け、またつくりながら展示するという、そういうみなび展のあり方もいいんじゃないかな。

村上:今回、バラバラにつくったものが、結果的に同じ場所に置かれたけれど、もしかしたら、ある家とある店をつなげるようなこともワークショップに組み込むことも考えられるのかなと思いました。

伊藤:松本城、ソリ、そのまま体験的なものが現れている、松本から通われている方(図5)、楽しまれましたか。

参加者母(以下 母):やはり、村上さんが村長なんですよね。村上さんの絵本を子どもたちが読んで・・・。彼らは、「移動するものをつくるんだ」ということでソリになった。タイヤはちょっと難しくて、9歳、7歳、5歳の発想では、動く家はソリだった。子どもに主体性をもってやらせると、こういうものが出来上るんだと面白かった。

村上:お父さんが手を出そうとしたら、お母さん止めてましたよね。(笑)

母:こういうときこそ、子どもの個性とか、やる気スイッチを。そのスイッチが大人に入っちゃダメなんです。

伊藤:いろいろやりながら、つくりながら考えていましたね。

母:私ひとりだと手一杯なので、ボランティアの方が支えてくれたから屋根ができました。2日間でできる量じゃないので、助けがなければできなかった。3人の子どもたちも、みなさんに迷惑をかけて育っているので。今現在も、ボランティアさんが子どもたちの相手をしてくれているので、ここに夫婦で参加できている。

伊藤:子どもたちの自由な発想があって、それを形にしたいんだけど、そばにいる大人が「よし、おれが」という出番をつくってくれるという関係性がある。子どもの自由な発想が、その重要なきっかけになる。

家に帰って、この夏休みに何をやるか楽しみですね。連続性の中で、別のものづくりにつながっていくかもしれない。そういうご家族じゃないかと思いますね。

村上:そこで、寝てほしいですね。

母:体がまだ小さいので、寝られそうですね。

(図5)

伊藤:工務店の、専門家としていかがですか。

小澤(p.23):いろいろな面白い発想があって、よかったと思います。子どもの発想って、つくりながら発展していく。大人は、何かを見て何かを感じますが、その辺の感覚が違う気がします。子どもの発想はつくっていけばいくほど、発展性がある。そういうところが面白い企画だったと思います。

伊藤:普段はクライアントがいて、家の素人だから夢をいっぱい語って。それを聞いて形にしてプレゼンしていくわけですよね。

小澤:私も建築をやっていると、お客さんがいろいろ発想していろんなことを言ってくれるんですけど、固定された建築はある程度限界があり、その中で削ぎ落して行くみたいなところがあるんですが、たまにはこういう自由なことも頭の体操になります。

伊藤:今回、縄文の家(p.9)があって…。日本だと、木で家をつくるけれど、小澤さんの作品は現代的な素材ですよね。基本と、最先端のものがちょうど並んでいました。

小坂井:甲府工業高校さん(p.20)の竹をゴムで縛る家は、風にも強いと思う。有名な建築家のもので紙管でつくる家があるけれど、それよりも、可動性、可塑性があり、さすが高校生だと思いました。竹を使うことは、どうやって決まったんですか。

高校生:最初は、身近なもので家にある物干し竿を考えたんですが、あまりにも重いだろうということで、材料検討したところ軽くて丈夫な竹になりました。

伊藤:竹は伐り出しに?

高校生:廃材を先生がいただいてきました。

伊藤:素材を無駄にせず使ったんですね。

小坂井:強風にあおられたらどうなるかな。今日、台風来るんだけど。

伊藤:この辺は専門的ですね。バラバラにしてしまっておいて、また使う。不安な点はゴムの劣化だけだね。

伊藤:本杉さん(p.18)、どうですか。

本杉:みなさんの作品は、住むという意味では住宅ではなくて本当の家という感じがする。本来、家って、お子さんと親が一緒になって作り上げていくものなんだろうなと。それに比べて、僕の作品はどっちつかずで、つまらないものだな。

茂井:きれいすぎている。(笑)

伊藤:これから使っていって、そこに意味が入ってくる。

本杉:僕は、ものをつくるときは即興的なんです。ただ、昔の大きなビニールハウスをつりたいというのがあって、それが、観客が中でうごめいているのを観客として見たかった。それを作品にしたかった。もっと汚くつくりたかったけど、計画倒れが多いので。そう思うと、親子でつくられている方をみると、造形の原点を見ているような気がします。それに引きかえ、僕のは冷たいなあ。(笑)

伊藤:本杉さんの作品も温かいですよ。自分でつくっているとすべて自分の目の前ですべてが展開させるから、当たり前の日常生活なんですよ。だから、他の人が見ると、突然目の前にあるわけだから、「面白い」となるんです。小澤さんの家も、小澤さんが形だけつくってきただけだったら「すごい」という感じですが、内側を中川さんが装飾して味付けをしたというのが、一つありますね。そういう点では、私の学生がつくった作品(p.12)も、美術館に持ち込んだときに違和感があった。子どもたちが来て遊び始めたとたんに、家が生き始めた。やっぱり、そこにいる、だれがどう使うかということに、意味があると感じました。

本杉:先ほどの、ヤクルトが並んでいて、屋根瓦に牛乳パックが並んでいて、その連続性を僕も目指したかったんだけれど。そこに無垢のよさがある。魅力的でしたね。

伊藤:家って、いろんな人の技が入っていますよね。一人でやっちゃうと、あるところで平たんになってしまう部分があるかも知れないですね。

本杉:駄菓子屋さんも、昭和の感じがする、駄菓子が食べたくなるなど、連想させてくれるじゃないですか。かたい美術館の中に、こういうものが並ぶと、危険のにおいのない、優しい、世界観になりますね。

伊藤:このまま、駄菓子屋さんを置いておきますか。(笑)

上條:「駄菓子、売っているんですか」てよく聞かれました。(笑)

村上:本当に売っているかと思っちゃいます。(笑)

伊藤:一つずつ聞いていくと、まだまだ話が盛り上がりそうですね。みなさんを見ていると、これで終わりじゃなく、これからももものづくりを続けていく楽しみを持っているので、今回の経験を生かしながら、継承し発展させていければと思います。それをやっていくと村上さんの子どもが増えていく、そんな感じですね。

事務局:ご協力ありがとうございました。茂井さんのワークショップ(p.19)も広がっていくそうです。また会場にお越しいただき、皆さんで盛り上げてください。

(編集:小俣直喜)

「みなび」を振り返る

村上 慧　（美術家）

東日本大震災、原発事故、広島の土砂災害、御嶽山の噴火、熊本地震、数多くの台風、大雨、豪雪、猛暑に見舞われた2010年代が終わり、2020年代に突入した日の18時23分に、僕は昨年の「みなび」の記録写真を見ながらこの文章を書いている。

今回は「美術館に住む？」をテーマに、段ボールや紙などの素材を使って「家」（僕は「居場所」と呼びたいのだけど）をつくるワークショップを行い、近隣の工業高校や作家などに招待を送って様々な役割をもつ「家」を提案してもらい、また人々から模型の「家」を応募してもらうなどの準備期間を経て、出来上がった全ての「家」を美術館内に設置して約一週間公開し、いわば「別の町」を出現させ、来館者にその町を探検してもらうというような試みだった。僕としては、公的施設でありながら普段は展示されている作品を一方的に鑑賞する場所でしかない美術館をみんなで乗っ取り、自分の場所として見つけ直し、「公」は自分でつくるものだということを思い出せるようなワークショップをやりたいという意図があった。最終的には参加者が自分でつくった家の中で泊まり、本当に「住む」ような体験をしてもらいたかったのだけど、公式のイベントとして美術館に泊まるというのは思っていたよりもハードルが高く、実現できなかった。しかし美術館スタッフの方々の、本当に凄まじい努力のおかげで、僕を含めた関係者三人が館内に一晩泊まり、翌日その様子を参加者に報告することはできた。泊まってみると「ご飯をどこで買い、どこに座って食べるか」「お風呂や歯磨きをどこでこなすか」「どこがリビングの代わりになるか」という問題が出てくるので、普段過ごしている場所の見方が変わり、近所に知らない温泉や深夜までやっている食堂があることや、座る場所が街にないことを発見したりできる。それを複数人で行い、「どんなふうに過ごすか、過ごしたか」という話をすることで、同じ条件でもそれぞれ過ごし方が違うことを知り、それを通して社会というものの存在をぼんやりと感じてくれれば良い。そんなことを思っていた。

また冒頭に書いたような多くの災害に見舞われた僕たちは体験的に知っているけれど、災害時に人は自然と利他的になり、助け合うことができる。レベッカ・ソルニットという人がそのことを「災害ユートピア」という本の中で書いているらしい（本は買ったが、まだ読んでいない）。それを擬似的でもいいから、災害ではない時に体験できないかということもぼんやり考えていた。

今回は美術館で夜を過ごすという体験を提供することができず、単に工作趣味的な「家づくりのワークショップ」として参加した人も多くいたと思う。それでも例えば段ボールを箱ではなく素材としてみなすことで、色々な使い方が可能である事を発見したりして、何かしらこちらの意図を持ち帰ってもらえたとは思う。しかし「実際に夜を過ごす」ことが無理なのであれば、他にどのようなことが可能かをもう少し考えることはできたかもしれない。いずれにせよ「美術館に住む？」という言葉の最後のクエスチョン・マークについて考え続けることが大事なのだと思う。

今回この企画に関わらせてもらったことで僕自身、スタッフの皆さんの言葉や「みなび」への姿勢、美術館のシステムから多くのことを学んだ。この活動を通して「ワークショップ」とは、一人の人間である「私」の問題と、「社会」のなかの大きな問題を統合して考えるためのツールであることを発見できた。特に、僕に声をかけてくれた雨宮さん、色々な面で尽力してくれた小俣さん、一緒に泊まった小坂井さんをはじめ美術館のみなさんには大変お世話になりました。またワークショップに参加してくれたみなさん、近隣の教育施設の先生方や生徒達などサポートしてくれた全ての方々、コメントをたくさん残してくれた来館者の皆様、本当にありがとうございました！またお会いできる日を楽しみに僕も頑張ります。

「みなび」アンケートから

ワークショップ参加者や見学者に対して行ったアンケートから、「参加したワークショップ」、「ワークショップの内容についての満足度」、「その理由（満足度の理由）」、「今後参加したいワークショップ」についての集計結果を紹介する。

Q：どのワークショップに参加しましたか？（複数回答可）

トークショー	親子WS	「家ほめ」ツアー	語る会	お部屋を飾ろう	綿から糸へ	ミニWS	無回答
8	14	9	5	13	11	19	213

＊「無回答」はワークショップ参加者でなく、見学者による回答数。見学者の意見や希望は別に集計している。

Q：ワークショップの内容はいかがでしたか？

大変満足	やや満足	普通	やや不満	不満	無回答
62	16	7	0	0	196

Q：その理由は？

・描いた絵が持ち帰れた点がよかったです
・かわいい絵が描けたから　・とてもすごかったから
・とてもおもしろかった　・貴重な体験だった　・かわいかった
・ボランティアのお姉さんがとても優しかったから。
・ボランティアのお姉さんのたいおうがよかったから。
・色々な人の自由な家の想像力の高さにおどろかせる
・参加できて楽しい　・とても楽しみました
・色々な家で楽しめた　・たのしかった　・たのしめる
・お話をきけたから　・子どもも夢中に時間忘れて楽しみました。
・自由に製作ができて、家ではむずかしいダイナミックな作品が出来ました。
・3才児でもたのしくできたので。シールがよかった。
・家が作れて喜んでいました。感想を入れてくれるポストがあるのが良かったです。子どもが喜んでいました。
・子どもが興味を持ったため　・親子でたのしめました
・実際体験ができ、綿を糸にする大変さを感じることができたから
・どの家もこっていてすばらしい！
・子どもたちがたのしんでいた　・子どもが楽しめた
・家の中にもっと入れるのがあったら大満足　でもたのしかった
・子どもが自由に自分の考えを表現できる
・資材が豊富　・夏らしく楽しい　・色々な物があった。
・親子とも夢中になれた　久しぶりの夢中！
・思った以上に、たくさんの個性的、工夫された家の展示があった
・子どもたちにもの作りのおもしろさを知って欲しいです
・みんな工夫して家を作っていた
・子どもはこんな小さい自分のお城が大好き
・どれも上手に出来ている
・各々工夫をこらして楽しい家が見られた
・きれいな手作りのお家をたくさん見られた
・子どもと楽しく参加でき、ダンボールのおうちもみることができました
・描くところ、作るところがあって色々できて楽しかった
・不思議な体験でした
・子どもと楽しくコミュニケーションをとりながらできた
・めったに体験できないことなので
・やりやすかった（子どもがすくできてよかった）
・少しの時間でも楽しかったです
・子どもが夢中で参加していました
・素材をたくさん揃えていただき、スタッフも豊富で、お手伝いくださった
・みんなで楽しく作ったし、ほかのお家もすごく楽しかった
・みなびに参加でき、思う存分制作できて楽しみました
・こどもと一緒に絵を描く機会があったのでよかった
・美術館が普段と違う雰囲気で楽しかった
・子どもと絵を描く体験ができたため
・こどもも楽しく作っていましたが作った作品を持って帰りたかったようです

Q：今後、どんなワークショップ（WS）に参加したいですか（複数回答可）

簡単な工作WS	作家を講師に迎えた本格的ものづくりWS	知識が得られるWS	体を動かすWS	日常の疲れがとれるような癒し系WS	無回答	その他
75	22	33	29	34	148	3

今回の「みなび」では、一人の作家をメインゲストに迎え、その作家と我々両者の思いや考えをすり合わせながら、ワークショップやイベントを開催するという方法を試みた。必然的に工作やものづくりの体験的ワークショップを中心としていたこれまでの「みなび」とは大いに違う形となった。この違いが受け入れられることを願っていた我々であったが、アンケート結果を確認したところ、為り厳しい現実が浮かび上がったと言わざるを得ない。今後参加したいワークショップの回答として最も多かったのが「簡単な工作ワークショップ」、最も少なかったのが「作家を講師に迎えた本格的ものづくりワークショップ」だったのである。美術館開館40周年を迎え、新しい「みなび」を模索していた我々は、つきつけられたこの現実を真摯に受け止めて今後に生かさなければならない。

ただ、期間中の全体的な盛り上がりや、参加者個々の能動的な姿勢で楽しもうとする様子などから、新しい「みなび」ファンが獲得できたかもしれないという、手ごたえのようなものを感じたのも事実である。アンケートの「その理由（満足度の理由）」には以下のとおりの声が寄せられており、今後の「みなび」を行う上での大きな励みとなった。

・自由に製作ができて、家ではむずかしいダイナミックな作品が出来ました。
・子どもが自由に自分の考えを表現できる。
・めったに体験できないことなので。
・美術館が普段と違う雰囲気で楽しかった。

「みなび」への期待や要求に応えようとしながらも、美術館として質の高い事業を展開すること、これはたやすいことではないが、非常にやりがいのある仕事である。来年度もこれまでの「みなび」ファン、新しい「みなび」ファンと共に、今年度以上の「みなび」を展開したい。

高野早代子（実行委員・当館教育普及リーダー）

美術館に「住む」?

実行委員の気づきやあれこれ

アンケートの原文を掲載

「みんなでつくる美術館(みなび)」は、2002年のスタートから、誰でも参加できる参加型展覧会として続いています。

2019年度の「みなび」も、もちろん同様であり、何回か実行委員会を重ね、今までに行ったことがない方法を取ることに決めました。実行委員メンバーの生の声を「みなび終了後のアンケート」より掲載します。

家というテーマは、おままごとや秘密基地で遊びという子どもの気持ちで楽しめること、自分の感性で空間をつくり上げることの、両方が実現できる、とても可能性のあるテーマでした。

アーティストの活動を軸にすることで、テーマ性がはっきりし、本格的なワークショップと展示になりました。

移動してその地に住む(起きて寝る丸一日)そのためにカタツムリのような家、その村上氏のコンセプトはトークショーや映像展で紹介され、家をそんな風に捉えられるものなんだと感動し、家づくりの意欲につながりました。

親子での参加とはいえ、具体的に自分たちが住むことを前提にした作品を制作することは、難しいのではないか。想像力は子ども次第とは言え、もう少し理解しやすい説明が欲しい。

事前に参加依頼をしたことで、次につながるトークショーへの参加者も高校生などさまざまの年齢層が集まり、家づくりも盛大に行われたと思う。招待グループ、エントリーグループの見極めが難しい。予算とも関係する。

高校生の活躍が目立ったことはとても良かった。幅広い世代に広げていくためにテーマ設定や企画に時間をかけ練っていきたい。

やはり、学生さんたちの取り組みやすい進め方になるであろうが、これからの時代を考えると現代美術とシニア世代を結びつけるようなWSがあってもいいか。

実際のところ、すべての人によろしく、は不可能なので、その年のテーマと方向性を明確にしていくのが良いか。

今までは、実行委員、講師、ボランティアでみなびを盛り上げている感じがしたが、家制作者(招待エントリー)などにより、みなびの輪が広がったと思う。さらに、輪を広げていくために、いろいろな方に協力を得られる内容を考えたい。

「みなび」は大人も子どもも、障がい者もだれでも参加できる参加型展覧会と言いながらも、展覧会を作る側を重視。今回、幅広い年齢層、バラエティー豊かな観覧者が、アンケート用紙を手に楽しそうに館内を巡り、自然に参加。発信、受信の両者のバランスが良かった。

テーマがとても身近に感じられた。次年度もより身近なテーマにすることで参加者がわかりやすいものにしていく必要がある。

従来の子ども中心の参加だけでなく、家族、グループ、アーティスト、障害者、様々な人の参加を促し、村上さんにも刺激を与えることができたと感じました。

今までは、県美の中の一部分が「みんなでつくる美術館」であったが、広くパブリックスペースを使用したことで、今年は、全館が「みんなでつくる山梨県立美術館」になったと思う。

あらかじめ家を設置する場所について学芸課担当者と施設担当者で館内を回って確認できて良かった。それにより、お客様の導線を確保した上でお客様に「家」の作品を楽しんでいただけた。このWSに関するご指摘アンケートは1件もなし。

3〜5年ほど、「家」「住む」を続けるのもよいと思います。今年見た人が、来年参加する、今年参加した人がグレードアップする。繰り返すことで「みなび」が浸透する。経験値が蓄積するのでスタッフの負担も軽減できる。一方で、同じような展開ができるのであれば、新たなテーマでもよいと思います。今後も、アーティストと参加者が互いに刺激し合える内容を期待します。
アートを身近に感じ、参加してもらえる、アートの入門編ともなりうるものに。

団体での、施設や園での参加は、今後も増えると思う。団体だと、引率者の目が届かないので、団体での見学参加も、事前に連絡をもらうか、入場した時に受付で名乗ってもらい、安全面には十分注意していただくよう伝えることも必要。

さらに美術館を親しみやすくする、新しい出会いをつくる場、をどう設定するか。

美術館に「住む」?というテーマや「家」から、「気になる」→「行って見よう」になり、親しみ度増になったと思う。

エントランスロビーや県民ギャラリーCの展開の仕方、家褒めツアー、語る会、宿泊など時間をかけて村上さんと内容を詰めることができなかった。参加者の宿泊は不可能で終わってしまったが、これにかけた時間と労力は無駄ではなかったと思う。土壇場だったので、他のことにしわ寄せが来た。

参加者が制作した作品を美術館内に分散して展示することが果たして効果的かどうか。

美術館に住む、の『住む』ということを発展させることでいろいろな取り組みにつながられるのではないかと思う。『美術館』とはどのような場所で、そこに住むことをテーマにすることで、なぜ美術館に泊まるのが困難なのかクリアになり、新しい「住む」の提示が出来るのではないか。

閉館後に泊まる行為について話題性とリスクを考えた時、再考が必要と考える。

美術館職員の方々、ボランティアの方々の働きかけがありがたく、多く学ぶことができた。

WSの回数、参加者の人数増という観点では数は増えていないが、「みなび」の今年のコンセプトが統一されたように思う。このスタイルを続けてはどうか

ボランティアスタッフの主体的な活躍を促すためには、仕事内容、日程、配置を明確に示すことが大切で、それが了解されたうえでボランティアさんも生き生きと活動できると思える。仕事内容をその都度確認し、人をどの様に配置するかをあらかじめ立てる必要がある。これまで使っていた日程表、計画表をつかう。ボランティアさんの視点で改善する。

美術の側面から「住む」を見ていくと、本当に様々なことが浮かび上がる。終わってみて、自分自身で「住む」にどこまで家は必要なのか考えさせられた。生活すること自体が芸術的行為でありたいと改めて感じた。

あとがき

2019年4月にある高校を訪問し、「みなび」での家づくりのご協力をお願いしたところ、「美術館でそんなことやってよいのか」と、先生に言われました。

しかし、この先生と生徒は、村上さんのトークショーを聴講し、個性的な家を制作展示してくれました。後日、「たくさんの来館者と接し、有意義だった。」と振り返っています。

皆様は、美術館に対してどんなイメージをお持ちでしょうか。美術館が特定の人だけのものではなく、「みんな」が共有できる場所であることに気づいて欲しいという思いを「住む?」というテーマに込めて展開した2019年の「みなび」。今後も美術館をより身近に感じていただくために「みんなでつくる美術館(みなび)」を展開していきたいと思います。どうぞよろしくお願いいたします。

「夏が来ればみなび」で18年が過ぎました。多くの参加者やボランティアの皆様のお陰で、ここまで続けることができました。本当にありがとうございます。

みんなでつくる美術館実行委員会

実行委員長	青柳　正規	(山梨県立美術館館長)
副実行委員長	伊藤　美輝	(山梨学院短期大学教授)
実行委員	田中　静男	(書のたまご教室主宰)
	島津　久美子	(山梨県立美術館協力員)
	梅津　譲	(美術作家)
	中村　伸也	(公立小学校教諭)
	小俣　晴美	(河口湖美術館職員)
	鈴木　つな	(ダンサー)
監事	田中　實	(山梨県立美術館協力員)
	波多野　秀子	((株)SPSやまなし支配人)
事務局長	井澤　英理子	(山梨県立美術館学芸幹)
事務局	高野　早代子	(山梨県立美術館教育普及リーダー)
	下東　佳那	(山梨県立美術館学芸員)
	小俣　直喜	(山梨県立美術館教育主事)
	瀧澤　智子	(山梨県立美術館教育主事)
	雨宮　千鶴	(山梨県立美術館職員)

みんなでつくる美術館　2019年　記録集
編　集｜みんなでつくる美術館実行委員 事務局(雨宮千鶴 小俣直喜)
デザイン｜雨宮千鶴
発　行｜みんなでつくる美術館実行委員会　©2020

ご協力の皆様
(含、山梨県立美術館協力員)
(順不同、敬称略)

村上　慧

小幡　光春
太田　美智子
太田　秀夫
市村　未央
川村　瑛子
李　昇浩
岩田　未衣菜
小田切　伸秀
秋山　諄
長田　尚美
木村　理香
数野　久美子
志田　邦子
首藤　成子
樋口　由香
真壁　芳子
三井　みどり
森澤　ひろ美
山本　かつ江
渡辺　弥生
磯野　秀子
牛山　龍子
森本　祐紀
石原　祐子
及川　圭子
清水　俊幸
高木　則子
時田　千昭
田端　康三
藤田　毅
藤原　真理
藤本　恭子
中島　敏夫
樋口　文枝
五味　増雄
本杉　琉
Sakura Fantasma Sato
青柳　一美
横山　由美子
伊久美　留美

みんなでつくる美術館(みなび)　実行委員会事務局
山梨県立美術館　学芸課内
〒400-0065 山梨県甲府市貢川 1-4-27
Tel：055-228-3258　Fax：055-228-3418
https://www.art-museum.pref.yamanashi.jp/